IS＜インフィニット・ストラトス＞－Strongest and Weakest－

ヒノカマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞－Ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ａｎｄ　Ｗｅａｋｅｓｔ－

【Ｎコード】
Ｎ３７３７Ｑ

【作者名】
ヒノカマ

【あらすじ】
インフィニット・ストラトス　通称＜ＩＳ＞　それは女性にしか扱うことの出来ない最強の兵器。それ故に世界は女尊男卑となる。その世界に変化が訪れようとしていた。一人の男の存在によって……
この作品は原作のＩＳを使える男性は織斑一夏だけという設定を崩していません。原作で他の男性がＩＳに乗らない限り、この作品で男性がＩＳに乗る事はありません。

全てを揺るがす男

ガヤガヤと騒がしい雑踏の中を歩く。右を見ても人、左を見ても人、前も後ろも同様。周りは夜とは思えないほど明るく、その明るさの為、星は見えていない。

ふと、足が止まった。ある電化製品店で陳列されているテレビ。そこにバラエティーやＣＭなど様々な番組を映していた。その中の一つに目が行く。

『始まりました。朝まで煮テレビ』

それはとある討論番組のようだ。司会は誰もが見た事のある有名人。その周りには世界的にも有名な先生方が席を並べていた。そして番組内のモニターにある男性の顔写真が映し出された。

『今日の話題は織斑一夏くんについてです』

何処にでも居そうな男子学生。見た目１４、５歳といったところだろう。その彼が討論番組の対象になっている。普通なら政治などを題材にするものではと思うが、彼が行ったことは世界に衝撃を与えた。

『私は良くわからないんだけどね……これってやっぱり大変な事なの？』

『そりゃ世界で初めてですから男にＩＳを動かせるなんて』

ＩＳ、正式名称【インフィニット・ストラトス】宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

しかし、製作者の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果こ

のスペックを持て余した機械は兵器へと変わり、それは各国の思惑からスポーツにと落ち着いた……所謂、飛行パワードスーツである。

だが、このＩＳは誰にでも使えるモノではない。

『ＩＳは女性にしか使えないモノなんですよ』

ＩＳは男性にはまったく反応せず、女性にしか反応しない。どうしてそのようになっているか誰もが知りたい事ではあるが開発者である篠ノ之束（しののの たばね）が行方不明な為、誰もその理由を知らないでいた。

いや、例え見つかったとしても彼女は、答えを提示しないだろう。篠ノ之束とはそういう女性である。

『でも、彼は動かした、と』

そこに女性にしか動かせないモノを動かせる男が現れた。それに世界が注目せずに誰が注目すると言うのだろうか。テレビでは彼の今後について色々論議されている。

それをボーっと眺めていると胸元にしまってあった携帯が震えた。ゆっくりした動作で携帯を取り出し画面を見ると、こちらから連絡をしても一切応じない相手からの電話。

「もしもし……あぁ、ちょうど見てるよ」

男がＩＳを動かした。この情報はすぐに知ることが出来た。ただし、それが誰なのかはしばらくの間秘密に、情報が規制されていた。そしてそれが誰なのかが公開されのはまさに今日。だから各番組は待ちに待ったと言わんばかりにこの件の特集を放送している。

「バカだねぇって、それだけ世界が驚いてんだろ」

ちなみにこの情報規制は日本だけでなく、世界中も同じ状態になっていた。チャンネルを回せも回せも全部ＩＳ関連の番組。違うことをやれば視聴率を根こそぎ持っていけるはずだ。

「それよりそろそろ、説明を願いたいんだがな」

実の所、電話をしているこの男―白波（しらなみ）　烈震（れっしん）―は今までとある事情で各国を旅していたのだが、つい三日前程に日本に戻るようにと命令され、今日の午前の便で日本に帰ってきた。

その時の様子だが……

―はぁ？　まてって、日本に帰れってまだデータは揃って、いやいやいや、全然不十分だ！　おい、こら、聞いて……って切りやがった―

と一方的。

再度かけ直すもこちらからの電話は一切出ない。あちらからは容赦なくかかってくると言うのに理不尽である。

「行けばわかるだと。なに？　手続きは終わってる？　おい、マジでなんの話だ、こら」

またしても矢継ぎ早に言葉を聞かされる。こうなるともう相手は止まらない。

そして、こっちが質問をする前に

「頑張れじゃねぇ！　だから待て……って、あの野郎、また切りやがった！！」

結局、帰ってこさせられた理由はわからずに電話は終わってしまった。ダメもとでかけ直すが、出る気配どころか。

「この電話は使われておりませんじゃねぇ！！　つい数秒前にかかってきただろうが」

携帯に向かって吠えても意味がないのはわかっているのだが、吠えずにはいられない。ちなみにこの流れはいつもの事だったりする。

「たく、あの野郎。今度会ったら拳骨で頭グリグリしてやる」

ここ数年会った覚えがない相手だが、あの顔は忘れる事はないだろう。例え顔が変わっているとしても、声の雰囲気はまったく変わっていない。あの独特な雰囲気は変えようと思っても簡単には変えれない。

「それにしても、よりにもよってＩＳ学園かよ」

視線をテレビへと向ける。始まったばっかりの討論番組の話題はＩＳ学園へと移っていた。

ＩＳ学園というのは、
ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し。協定参加国全体が

理解できる解決をする事を義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保証する事。ＩＳ運用協定「ＩＳ操縦者育成機関について」の項より抜粋。

という学園である。

そのＩＳ学園が明日からの職場となる手続きがされた様だ。本人の知らないところで。

「たく、めんどくせぇな」

髪をガリガリとかき乱す。すでに決まってしまった事。もう自分自身の力では取り消すことは出来ない。

討論番組はまだ続く。それを横目にまた雑踏の中へと紛れる様に歩きだした。

その顔は言葉とは違い、楽しそうに笑っていた。

全てを揺るがす男（後書き）

こんばんわ。こんにちわ。
アニメを見たら書いてました。
９０％勢いですｗ

次回更新ですが、現在別作品も連載していますのでこちらは不定期更新となります。

ボディーガード？　いいえ、技術者です

「初めまして、白波烈震（しらなみれっしん）さんですね。私はＩＳ学園学園長代理の……」

日は変わり、各交通機関を使い難なくＩＳ学園に辿り着いた俺は、こうして学園長室にまで案内され、説明を受けていた。説明役が代理なのは、学園長が織斑一夏の件で大忙しらしく俺の相手をする時間がないみたいだ。

そんなんで大丈夫かＩＳ学園？

さて、代理の方の話を聞くと、どうやら俺はこのＩＳ学園のＩＳ整備員として、さらに世界初である男のＩＳ操縦者、織斑一夏の相談役として呼ばれた様だ。

ＩＳは女性にしか扱えない。だからＩＳの使い方を教える事ができるのは女性でなければならない。よってこのＩＳ学園の教師は９割が女性であり、男性教員は数える程しかいないとの事。

何の為に呼ばれたのはわかったが、疑問がある。だからストレートに聞くことにした。

「それ、俺……自分じゃなくても大丈夫では？」

危ない危ない。危うくタメ口になるところだった。こういう上下関係がはっきりしている所は久しぶりだから、敬語って事を忘れてたぜ。

話を戻すが、ＩＳの整備は先に述べた理由からも男性より女性の

方がいい。いくら男性が整備しても自分で動かして確認することができない。かわって女性であれば整備、動作確認等々すべて一人で行える。

さらに織斑一夏の相談役だが、わずかながらも男性教員はいるのだからそいつ等に任せればいい。わざわざ、俺にしなくてもいいはずだ。

「白波さんは織斑一夏くんがどのような存在かご存知ですね？」

「えぇ、世界初の男のＩＳ操縦者であると」

「そうです。そして彼は法的に守れるＩＳ学園に入学してきます」

それはそうだろう。織斑一夏はＩＳ学園に入らなければ各研究機関によってモルモットとされてしまう可能性があった。だからＩＳに関わる全てを守る事ができるＩＳ学園に入学することになったのだ。

これにより織斑一夏は三年間、安全が保証される。

「ですが、ＩＳ学園に入ったからと言って安心できません」

「……まぁそうでしょうね」

なんとなく、話そうとしている事が見えてきた。

学園に入っていても身柄を確保するだけなら幾らでも手はある。簡単に言えば拉致だ。それだけの術（すべ）を世界中の国々は持っている。要は拉致などから織斑一夏を守る為にボディーガードをつけるという事なのだろう。それは良い事だと思うし、話もわかる。

しかしだ。

「頼る相手を間違えてませんか？　自分はただの技術者、ボディー

ガードではないですよ」

確かに世界中を旅をして、危ない国にも行った事はある。その時に自分を守る術を身につけはしたが、それだけ。他人を守る技術など持ち合わせていない。

「我々も最初に聞いた時は疑問に思いましたが、推薦人が無視できない人でしたので」

「推薦人って」

なんかもうすぐに想像できてしまう。俺をここに来るように仕向けた張本人。そしてＩＳを開発した稀代の天才。

「篠ノ之束、か」

「よくわかりましたね」

「腐れ縁ですから。良く引っ掻き回されてる」

それに助けられている。あいつがいなかったら今の俺はいないだろう。多分なにもかも普通のサラリーマンをしていたに違いない。

「それで、たば……博士から織斑一夏の護衛には自分が最適と」

「えぇ、あなたは織斑くんとも面識はあるみたいですし、初対面よりもいいかと思いましたので」

「そうですか」

面識はあるにはあるが、２、３回会ったぐらいだ。どちらかと言うと俺と接点があるのは織斑一夏の姉、織斑千冬の方。ただし、今一番会いたくない相手でもある。

「そういう理由から白波さんと決まったのです。わかって頂けまし

たか？」
「はい、いくら文句を言っても無駄だとわかりました」
「それはよかった。では次に……」

それからまた別の説明を始める代理人。
それをボーっと聞き流しながら、頭の中では祈っていた。織斑一夏と会うという事は、織斑千冬と会う機会が増えるという事だ。今会えば確実に殺される。
できれば、今日から一週間会わないことを願いたい。一週間あれば、会った時の対応方法を考えれる。

はい、俺の祈りは神には届かなかったようです。

「では、白波先生」
「あーはい。初めまして白波烈震です。よろしくお願いします」

一礼して職員室を改めて見回す。そして意図的にある方向だけ見ない。というか見れない。凄まじく殺気を込めた瞳があるのだから。

学園長室で行われていた説明が終わり、代理人と共に職員室へと向かった。どうやら本当にここは男が居ることが珍しいようで、廊下に居た女子生徒達が俺の事をチラチラと見てきた。

そして職員室に辿り着き、中に入った時、視線に奴が織斑千冬が

いたのだ。一瞬見間違いかと思って二度見してしまったよ。それは千冬も同じだったようで俺を見てビックリしていた。そして睨みつけてきた。

「白波先生には学園にあるＩＳの整備と一年生の織村くんの相談員の仕事をしてもらいます。また、織村君に関わる問題がありましたら白波先生に相談してください。では、先生のデスクはあちらです」

促された先は、運が良く千冬とは真逆の場所。よかった、隣とか真正面とかだったらどうしようかと思った。そして席に腰をかけ、両隣の先生方に軽く挨拶をして、朝の会議が始まった。

会議が終わるとガタガタと先生達は立ち上がり、それぞれが受け持つクラスへと向かっていく。そんな中、俺はこれから行く場所の確認をしていた。

ＩＳ整備格納庫。

ＩＳの数は世界で４６７機しか存在しない。ＩＳの中心たるコアを作る技術が一切開示されていないからだ。さらに篠ノ乃束が一定数のＩＳコアを作ることを拒否している為であり、おかげで各国は割り振られたコアで開発・研究などを行っている。そして、ＩＳ学園が所有するＩＳは生徒の使用するＩＳ、教師陣のＩＳ、専用機を合計すると約３０機ぐらいになるらしい。それで、格納庫にある生徒が使用するＩＳ打鉄を見に行こうと思っていた。

「うし、場所はわかったし、さっそく行くと……」

イスから立ち上がり、反転した先にいたのは鬼の形相をした千冬だった。つか、鬼そのものだな。

「……」

困った。知らない顔として挨拶すべきか、知り合いとして挨拶するべきか。いや、間違いなく後者が正解なのだろうが、どっちを選んでも不正解な気がしてならない。

「久しぶりだな、ち……織斑……先生」

昔なじみで千冬と言おうとしたら視線で黙殺されたぞ。こいつ進化してやがる。

「お久しぶりですね、白波先生」

千冬は千冬でスラリと名前に先生をつけてきやがった。慣れてるな。こちとら先生って呼ばれるだけで背中がかゆくなるってのによ。

「いつお戻りになられたのですか？」

出てくる言葉はとても丁寧だが、顔が笑っていない。なぜ彼女がこんなにも怒っているかと言うと、原因がわかりすぎて嫌になる。数年前、俺は彼女との約束を破り、それ以降彼女とは会っていなければ、連絡さえ取っていなかったのだ。そりゃ誰だって怒るわな。

「昨日の午前中にな。そちらは相変わらず元気そうで」

向かい合う俺たちをクラス持ちでない、職員室に残っていた先生達が、ある者はチラチラと、ある者は直視、ある者は物陰から、視線を向けてくる。それ以上に目の前で俺を睨みつける千冬の視線の方が痛かった。

なぜ、神様は俺を見放したのだろうか。なにか悪いことをしましたか？

したね、うん、盛大にした覚えがあるよ。ちくしょう、神様のばかやろー！！

「えぇ、私は元気ですよ……」

黙って睨むなよ。えぇい、周り！　変な予想してんじゃねぇ！！

「で、何か用か？」

「……ハァ、昼頃時間を空けておいて欲しい」

「（なぜ溜息を吐く？）昼頃ね、了解。多分ここにいると思う」

「わかった」

そう言って千冬は職員室から出て行った。出て行ったのを確認してからゆっくりと椅子に座り背もたれに身を預けた。久しぶりに会ったというのもあってか、無駄に緊張していたようだ。

それにしても相変わらず美人だよな。

「って何を思ってんだか。さっさと行くとしますか」

ここから俺の新しい日常が始まる。長くても三年間。

自分に宛がわれたデスクに手を置き撫でた。

「これからよろしくな、ＩＳ学園」

ボディーガード？　いいえ、技術者です（後書き）

2月15日
一部訂正及び、行間を修正。
誤字修正

お前は、何を隠している

目の前にはホカホカと美味しそうな湯気があがる白米。おかずには綺麗な焼き色をした鮭と味噌汁。味噌汁の中身は定番のワカメと豆腐。

数年ぶりの日本食を目の前にして俺は今になって漸く、日本に帰って来たんだなと実感する事ができた。

「いただきます」

手を合わせ、箸を手に持つ。世界中を旅していた時はずっとナイフとフォークの食生活だったから、箸の扱いを忘れているのではとか思ったが流石に覚えていた。少し動かしづらいが、すぐ前のようにスムーズに動かせるようになるだろう。

「パク……モグモグ……あー、旨い」

銘柄のわからない白米だが、優しい甘さがあり純粋に旨いと思わず声を漏らしてしまった。そして鮭や味噌汁も口へと運び、その口や手は止まらない。

「……」

それを呆れ顔で眺める対面に座る女性。彼女、織斑千冬はカルボナーラをフォークで弄っているだけで、ずっと俺を見ていた。

午前中にＩＳ整備格納庫に向かいどういう職場かを見学。学園にあるＩＳは＜打鉄＞だけではなく＜ラファール・リヴァイブ＞もあるようだ。軽くコンソールを弄りデータを見ると、かなりいい整備

がされていた。俺は不要なんじゃないかと思える程に。

そしてそこに居た先任の整備員に挨拶をし、お互い自己紹介。驚いたことにいままで彼女―穂村彩流(ほむらさいる)―だけでこの数のＩＳを整備をしていたらしい。だから俺が来たことがかなり嬉しかったようだ。

その後、彼女から仕事場の説明を受け、千冬との約束の時間になったので職員室に戻っていた途中で千冬とばったり出会った。

そして、このまま職員室へ行くよりも昼時なのだから食事でもしながらどうだと提案して今に至る。

「たくよ。食事中ぐらい睨むのやめろよな。飯が不味くなる」

「……ふん」

口の中は最高なのに周りを包む空気は重く最悪。食事の時間ぐらい楽しくありたいものだ。

それから数十分、俺達の食器は綺麗に空となり食後の一服中で緑茶をゆっくりと飲……

「もういいだろう」

ませてはもらえないか。

どうやら千冬は見抜いていたようだ。俺がこのまま時間を使い続けて、昼の時間を終わらせようとしていた事に。

「今迄何をしていたか洗い浚い吐いてもらうぞ」

「何をしてたって、単に旅行してただけだぞ」

世界中を渡っていたのは本当。ただし、超が付くほど危険な旅。

各国のＩＳ研究所に潜入しデータを収集、どう考えても犯罪です。

そりゃもう軍隊に追われたりもしたさ。何とか顔は割れていないと思うが、容姿だけで指名手配されているはずだ。

俺、よく生きてるな。

「なら、なぜ何の連絡もなかった」

「携帯がぶっ壊れた」

「ほぅ」

疑いの眼差しを向けられる。千冬の手にあるフォークが変形して見えるのは気のせいだ。ちなみに俺が言った事は大嘘である。五年近く使っている携帯だが、未だ壊れる気配は無い。

「あの日、私の電話を無視したのも壊れていたからと？」

「……あ、あぁそうだぞ」

目で人を殺せるというのはこの事を言うのだろう。目には見えないが今俺の喉には真剣が突きつけられている状態に近い。それほどまでに千冬の目が冷たい。おかげで見事にきょどってしまった。

「……お前は、何を隠している？」

「何も」

俺のしている事は誰にも言えないし、話すつもりはない。それが友人である千冬であってもだ。絶対に巻き込ませない。こんな面倒な事をやるのは一人だけでいい。

「そろそろ昼休みも終わるな」

わざとらしく腕時計に目をやる。ここに嘘はなく、午後の授業開始まで10分となっていた。俺は別に時間を気にする事はないのだが、クラス持ちである千冬はそうはいかない。

千冬も時計を見て、一瞬だけ悔しそうに口元を歪ませた。

「そろそろ行った方がいいんじゃないか、織村先生？」

「……そうだな」

ゆっくりと立ち上がりトレーを持って歩き出す千冬。それを黙って見送る俺。と、千冬が俺の方に振り返った。

「シン……いつか全てを話してもらうぞ」

「……なんの事やら」

「ふん」

100％不満顔で千冬は食堂を出て行った。

ゆっくりと身体を脱力させ、湯飲みに手を伸ばす。熱々だった緑茶は生温いが、今の気分には丁度よかった。

「さすがに＜打鉄＞と＜ラファール＞以外のデータは守りが厳重だな」

食堂で千冬によって削られた気力を回復させた後、整備格納庫へと戻りどんなデータがあるかを確認していた。

もしかしたら【餌】になるデータに出会えるかもと思ったが、そう簡単に見られるはずもなく、専用機のデータはしっかりとロック

がかけられていた。

「この二機じゃ餌にならんだろうし」

「何してんの？」

背後からかけられた言葉に振り返ると、つなぎ姿の穂村彩流が工具箱を持って立っていた。姿が見えないと思ったらＩＳの整備に行っていたようだ。

「ん、＜打鉄＞のデータを見させてもらってる。ここのＩＳは中々に良い整備がされてるよ」

「褒めたって何もないわよ？」

「素直に受け取っておけって」

この旧友のようなやりとり、彼女とは今日初めて会ったばかりだというのに、かなり心地良い。彼女とは良い関係が築けそうだ。

「それで、なんで今更＜打鉄＞のデータなんて見てるのよ？　特に珍しくもないはずだけど」

「いやいや、ＩＳのデータは見ているだけでおもしろいだろ」

この感覚は一般人には到底理解できない事らしい。前に友人にＩＳのスペックについて語ったがドン引きされた経験がある。数値を見ているだけでもかなり楽しいのになんでわかってくれないかね。

「そりゃそうだけど。本当に見てただけなの？」

「おう」

実際は【餌】になるデータを探していたんだけどな。殆ど収穫は無かったが。ただ、このＩＳ学園には専用機持ちが何人かいる。焦

らなくても大丈夫だろう。

ちなみに先程から【餌】と言っているのは俺の本業に関わる事だ。整備員や相談役は副業。本業である技術屋の任務は絶賛継続中である。

「そう……ねぇ、烈震。気になる事はない？」

「気になること？」

彩流は少し何かを思案した後、俺の横に立ち＜打鉄＞のデータが写されているモニターを指差した。

「＜打鉄＞はもう少し改良の余地があると思うんだけど、ここをさ」

彩流の持ち掛けた話は＜打鉄＞の改案。

彼女はキーボードを操作してモニター上の＜打鉄＞の情報を書き換えていく。中々におもしろい変更だ。だがそれよりも面白い考えが頭を満たす。

「それもいいが今思い浮かんだんだが、そこよりも＜打鉄＞の特徴である……」

それから俺と彩流はずっと改案話で盛り上がり、気付けば深夜２時なんていう時間になっていた。　久々に熱いＩＳの話が出来て楽しかった。ずっと一人旅でつまらなかった日々だったが、これが毎日続くのかと思えるとここに来たのも悪くは無い。

彩流と別れた後、用意された自室へと戻りそのままベットにダイブ。今日は主に千冬関係で体力気力を持っていかれた。

もう疲れたし、このまま寝てしまおうと思った時だ。なにか一つ

忘れてる気が……

「あー……そういや、織斑一夏に会ってねぇな」

お前は、何を隠している（後書き）

これ以上オリキャラは出さないと思う。多分ｗ

簡易キャラクター紹介

名前：白波（しらなみ）　烈震（れっしん）
年齢：２９歳
身長：１７８ｃｍ
体重：７４ｋｇ
髪色：黒
髪型：ショートウルフ

名前：穂村（ほむら）　彩流（さいる）
年齢：２９歳
身長：１６０ｃｍ
体重：秘密
髪色：茶
髪型：セミロング

２月１５日
誤字修正

罠に嵌められた気分だ

「……んだぁ？」

日差しが入り込む部屋にロックな曲が流れている。この部屋で音楽を流す機器は決まっている。それに手を伸ばす。

「……アラームじゃねぇ？　あ……」

音を流し続ける携帯を見ると画面には、モーニングコールにしてはめんどくさい相手の名前が表示されていた。

心では無視したかった。だが無視するとそれこそ面倒な事になる。以前、どうにも電話に出ることができず一日丸々無視し続けたら、一日中の長電話に付き合わされた事がある。

「もしもし？　あー、相変わらず元気だな」

電話の相手の所在地が不明だから、俺の方は朝だが相手が朝とは限らない。とは言え、こいつは朝だろうと夜だろうと深夜だろうと関係なく電話をしてくる奴だ。今のこの電話だって、珍しくまともな時間にかかってきた。

「お前のおかげで初日からビックリだらけだったぞ」

赴任させられた理由やら、まさかの千冬やらと、初日からがっつりと体力を削られたモノだ。

そしてまさかの千冬の件だが、こいつは知っていたはずだ。ＩＳ学園に千冬が居た事を。

「てめぇ、なんで千冬がいるって教えなかった」

聞いてみるも大体は予想できる。こいつは基本忘れているか、その方が面白いからのどちらかに決まっている。

「言わなかったっけ？　じゃねぇ！　聞いた覚えと言うかＩＳ学園に送られた理由さえ、お前の口から聞いてねぇぞ！！」

俺の記憶が確かならば、こいつからの説明は一切なかった。学園に着いて全てを知った様なものだ。

「そうだっけー？　じゃ……あぁもう」

携帯を耳に当てたままベットから降りる。時計に目をやると、職員会議が始まる３０分前。今仕度を始めなければ遅刻してしまう。

「そんで、朝っぱらから何の電話だよ？」

昨日は挨拶などをする為にスーツを着ていたが、今日は違う格好でもいいだろう。整備員として行くならスーツよりもジャージかね。

「なに唸ってんだよ？　さっさと用件を……は？　なに？」

何か言われたが凄く小声で聞こえなかった。再度聞くが沈黙しか返って来ない。

「おーい、聞こえてって……あ？　……切りやがった。なんなんだよ」

突然の通話終了に唖然とする。いつもの如く一方的な終わりだったが今回は少し違った。内容が一切ない電話など今日が初めてだ。

「後でかけ直すか。どうせ出ないだろうけど」

身嗜みをチェック、問題なしだな。さて、それじゃ仕事をしに行きますか。

職員室に入り、自分の席へと向かう。その道、すれ違う先生方に挨拶を忘れない。結局昨日話せたのは学園長代理と千冬と彩流（さいる）だけだったから、今日で他の先生方と軽く話せるぐらいにはなっておきたい。

「白波先生、おはよう」

偶然という訳ではなく、整備班という括りなのだろう。俺の隣には彩流の席がある。椅子に腰掛けると俺と似たようなジャージ姿の彩流が挨拶をしてきた。

「おはよう、さ……穂村先生」

まだ二日目なのだから慣れるはずがないのだが、どうにもこの先生というのは恥ずかしい。呼ぶのもそうだが呼ばれるのも慣れそうにない。

今だって危うく呼び捨てで呼んでしまうところだった。他の先生

が居る時に呼び捨てはさすがにまずいだろう。

挨拶を終えたあと、会議が始まるまで適当に学園規約などを読み始める。正直な話、学園の事は何一つわかっていない。一応、教師としてここにいるのだから最低限のルールはわかっていないといざとなった時に自分が困ってしまう。

「（いけね、忘れるところだった。今日は織斑一夏と接触しておかないとな）」

もう一つの役職をすっかり忘れていた。俺がＩＳ学園に来た（来させられた）一番大事な理由と言う名の役職、織斑一夏の護衛。

これを昨日はすっかり忘れていて、顔を見ることさえしなかった。

「（さて、どう会うかね。まずはどのクラスかを知るべきか。担任が誰かも分からんし）……穂村先生、一つ聞きたいんだが」

「ん、なに？」

彩流はノートパソコンで何かを調べていたようだ。俺の言葉に反応はしたが手は止まらず目もパソコンから離れていない。

「織斑一夏って誰のクラスなんだ？」

「知らないの？　織斑先生のクラスだよ」

「は？」

なんだろう、また神様に悪戯された気分なんだが。

いや、織斑先生といっただけで千冬じゃないかもしれない。他にも織斑という先生がいるんだ。そうに決まって

「だから織斑千冬先生。織斑千冬を知らないとか言わないでよ」

「言わねぇよ……ハァ」

１００％千冬でございましたとさ。

「（これはやり辛いな）」

俺が織斑一夏を護衛する事を知っているのは少なくとも学園長と学園長代理人だけ。他の先生方は俺は単なる整備員&相談員であるとしか知らないはずだ。それは千冬も例外ではないはず。

あの感の良い千冬に感ずかれずに織斑一夏を護衛する事は可能か？

「（ハハ、無理。どちらかってーとあいつが傍にいるんだったら俺がやる意味ねぇじゃん）」

ここでまた俺がいる理由が消滅した。これはもう帰り支度をしてもいいんじゃないだろうか？

ＩＳの整備は彩流で事足りる様だし、織斑の護衛は千冬が居れば問題ないはずだ。ほら、俺がやる理由はどこにもない。明日にでも荷物をまとめるか。

だが、ここには専用機が集まってんだっけ？　それなら、ここなら正当な理由で調べる事が出来るし、命辛々調べる事もない訳だ。

「なんか、罠に嵌められた気分だ」

「なにが？」

「こっちの話」

荷物を纏めるのはもう少し先にするか。データが揃うまでは役職を全うするとしよう。

そして、職員会議後に織村のクラスへ向かおうかと考えたが、あ

まりにも話す時間がないと思い昼まで待つことにした。昼ならば一対一でなくても話せる場があるはずだ。それまでＩＳの整備をしていよう。

待ちに待った昼休み。いや、それほど待ってもいないがとにかく織斑一夏を見つけないとって、探すまでもなかったな。

食堂にいる女子の視線がある方向に集まっているのだ。それを追うと目的の人物を見つける事ができた。

「食事中に失礼。お前が織斑一夏だなって確認するまでもないか」

「え、あ、はい」

突然現れた俺に驚いている織斑の隣に腰を降ろす。すると、彼の対面に座っていた女子が不機嫌に顔を膨らませた。

「あぁ、そこの女子、楽しい時間を邪魔して悪いな」

「なっ、楽しくは」

「ないのか？」

「……」

あら、顔を真っ赤にして伏せちゃったよ。多分この娘は勇気を振り絞って織斑を食事に誘ったんだろう。悪い事をしたな、さっさと用を済ませるか。

「悪いが少し時間をもらうぞ。自己紹介がまだったな俺は白波烈震、

これでもお前と会うのは４度目なんだが、覚えてないか？」
「え？　しらなみ……しらなみ？　えーっと……」

覚えている訳がないか。俺がこいつに会ったのは計３回、内話した事があるのは１回だけで、さらに話した時間は１０分程度。会話の内容はあまり覚えていないが、なんか碌でもない事を聞いた覚えがある。なぜかあの時の事を思い出そうとすると寒気が走るんだよな。

「覚えてないならそれでもいいが、時間がないからサクッと説明するんぞ。何か困った事があったら俺に相談しろ。勉強でもＩＳについても、恋愛でも、なんでもいいぞ」
「え？　え？」
「要は俺はお前専属の相談員だって事。女だらけの空間に男一人は辛いだろ？」
「え、えぇまぁ」
「それでお前の味方として俺が呼ばれた訳。で、これが俺の連絡先な」

事前に用意していた紙切れを手渡す。携帯の番号とアドレスが書かれている。両方とも今の携帯にしてから一切変わっていない。
織斑はまだ頭が追いついていないのか生返事しか返してこない。

「それだけ伝えたかったんだわ。そんじゃ邪魔して悪かったな。あとはごゆっくり～」

立ち上がってそそくさとその場を去る。ごゆっくりと言った時、女子からもの凄く睨まれたのはなぜだ？
そう言えばあの娘もどこかで見た覚えがあるんだが、どこだったか。

「その内思い出すか」
「何をだ？」
「いや、あの娘が誰なのかって、うおっ！？」

食堂を出た先にいたのは人の気力をごっそりと持っていく織斑千冬だった。これから食堂へ行こうとしていたのだろうか、彼女の後ろにはちんまりとした女性が不思議そうな顔で俺と千冬を交互に見ていた。

「織斑先生？」
「あぁすまない、山田先生。先に行っててもらえるか？」
「え、はい。あ、白波先生、失礼します」

そう言って俺と千冬に一礼して食堂へ入っていく山田先生とやら。正直、体格と風貌が合ってない気がした。身長が低いのにだぼっとした服装、さらに大きめの黒縁眼鏡で若干ずれている。無理矢理大人な女性をアピールしているように思えたのは俺だけじゃないはずだ。

「それでお前はここで何をしている？」
「何って食堂から出てきたんだ。飯を食べ終わったと思えよ」

さらっと嘘をつけるようになったよな。これも世界を旅した成果だな、全然嬉しくないけど。あと嘘をつくのは控えないと。目の前に居る奴は嘘に敏感な類（たぐい）なんだから。

千冬の奴、半目だよ。めっちゃ疑われてる。どんだけ信用ないんだよ。

「ほら、山田先生が待ってんじゃないのか？」

睨まれっ放しは身体に悪いから、さっさと食堂へ行くように促す。そして、睨むのを止めないまま千冬は俺の横を通り過ぎて食堂へと入っていった。

「ふー、なんであいつと話すだけでこんなに疲れなきゃならねぇんだよ」

「ねぇねぇ、織斑先生と昔なにかあったの？」

「なんもねぇって、今度は誰だ！？」

俺に心休まる時間はないのか？

隣にはなにか面白いものを見て、悪戯するぞといった顔をした彩流が立っていた。どうやらこいつは千冬とは逆で食堂から出てきたようだ。

「うわっビックリした」

「俺がビックリしたわ。彩……穂村先生、頼むから気配を消して近づかないでくれ」

「消したつもりはないんだけどね。で、織村先生とはどんな関係だったのよ？」

なんでこいつはこんなに楽しそうな顔をしているんだ。

それに今気付いたが、俺達の周りに人がちらほらといる。その内の何人かは俺と千冬との会話を見ていたのだろう。そのまま彩流の質問にも興味深々と言った感じで聞き耳をたてている。

さすがにこのまま黙って周りに聞かせる話ではないので歩き出す。彩流は当然の様に俺の横を歩き、周りで聞き耳をたてていた連中は諦めたのか付いて来なかった。

「別に、あいつのＩＳの整備をした事があるってだけだよ。それだけだ」
「織斑先生のＩＳってモンド・グロッソで優勝した時の？」
「あぁ。ただ整備と言っても、助手程度だったが」
千冬のＩＳの整備は全て束がやっていた。俺はただ、そのデータを纏めたり、部品を発注したり、飯を作ったりしただけで、整備その物には関わっていない。
あの二人、家事が殆どできないからそこら辺の仕事が全部俺に回ってきたんだ。
「それでも凄いじゃない。って事は、烈震って実はもの凄い人なの？」
「そんな凄くねぇって。俺は極々普通の技術者だ」
「ホントかなぁ？」
「どーみても平凡だろ。っとと、悪い彩流。先に行っててくれ」
「え、あ、うんわかった。じゃまた後でね」
胸元にしまってある携帯が振動しているのに気が付き、慌てて取り出すと電話だと思ったがメールであった。メールなら彩流を先に行かせる必要はなかったが、まぁいいか。
メールは一件、未登録者から。
「おっと、さっそくか？」
件名はよろしくお願いします。
そのメールの差出人は織斑一夏からだった。

罠に嵌められた気分だ（後書き）

アニメ６話がいけないんです。
３月まで書く気はなかったのに、シャルが可愛すぎて続きを書きたくなってしまった（ノ△・。）

シャルがというかヒロイン達が全然でていないけどねｗ

誤字脱字、感想意見などありましたら遠慮なくお願いします。

２月１５日
誤字修正

俺も最善を尽くしてやる

放課後。
俺は織斑一夏との待ち合わせ場所である剣道場へと向かっていた。
なぜ剣道場なのかは疑問だが送られてきたメールに書いてあったのだから仕方がない。

メールの文面は絵文字や顔文字が一切なく簡単なモノで『ＩＳについて教えてください』とあった。
一番最初の相談は恋愛事とか勝手に予想していたが、今の織斑に恋愛をしている余裕はないか。

「えーっと、剣道場はこっちの方だったな」

それにしても広すぎるぞＩＳ学園。まだ何処が何処だかわかっていないから目的地に向かうのに時間がかかるのは仕方がないが、ずっとこのままでは無駄に体力を消費してしまう。早めに最短ルートを探さないと。

「おお、あそこか。やっと着いたぜ」
「ほぅ、何をしに行くのだ？」
「……」

目の前に剣道と書かれた掛け札を確認し、ようやくたどり着けたと一息はいたとこで横から冷たい声をかけられた。
なんだろうね。俺ってそんなに神様に嫌われていますか？　なぜこんなにも千冬との遭遇率が良すぎるんだよ。

「あそこに何をしに行くと聞いているんだが」

ともかく今は嘘をつく必要はないか。

「何って、お前の弟にＩＳについて教えてくれって頼まれてな。その待ち合わせ場所が剣道場（あそこ）ってわけ。てか、お前こそここで何をしてんだよ」

千冬が現れたのは剣道場へ続く廊下の途中にある教室から。その教室を通り過ぎたときに俺は声をかけられた。

何かをしていたという感じは見受けられず、ただそこに居たという感じ。

もちろん俺を待ち伏せしてたとは到底思えない。俺を見つけたのは偶然だろう。

「……お前には関係ない」

「おい」

そっぽを向いて言葉を返す千冬。この感じは前にもあった気がする。

確かモンド・グロッソ予選の時、試合前にも関わらずどこかそわそわした千冬がいた。なにをそわそわしているのかを聞いたら『弟が熱を出した』と言って心配だと。その時は俺が看病に向かう事で千冬を安心させたが、あの時と今の感じは似ている。と、言うことは

「弟を心配してんのか？」

「っ！？　そんな事っ」

と否定の言葉を言いながらも千冬は顔を一瞬で真っ赤にして、顔だけではなく体も明後日の方向を向けてしまった。

どうやら大当たりのようだ。こいつなりにＩＳに不慣れな弟を心

配して、こうして様子を見に来たんだろう。もっと素直になればいいのに。

ここで昔のようにいじってもいいけどそうするとこの先、絶対に照れ隠しの暴力が振るわれるに決まっているので自重する。

「へいへいそうですか。……まぁ、お前がなんでここにいるかなんてどうでもいいんだ。特に俺に用事はないだろ？　悪いがこれ以上時間をとられる訳にはいかないんで、行かせてもらうぞ」

「……」

なぜジト目で睨む。なぜそんなに不満顔なんだ？　俺は何も間違ったことは言っていない筈だぞ。

「ふん」

そして千冬は不機嫌になったまま去っていった。

うん、意味がわからんから気にしないことにしよう。

「どうしてここまで弱くなっている！」

「いや、どういう事って言われても……」

なにこの修羅場？

剣道場へ足を踏み入れると、へたり込んでいる織斑一夏とそれを見下ろす女子生徒と周りを囲む大勢のギャラリーの姿があった。

部活の最中なのだろうが、部員は全員手が止まって織斑達を見て

いる。さらにそれとは別に制服姿の生徒の姿もあった。どう見ても剣道部員ではなく、しかも剣道を見学しているようにも見えない。

完全に織斑一夏だけを見に来た者達だ。

なんて暇な連中が多いんだろうか。

そんな事を思いながら、暇な連中に混じり壁にもたれ掛かって二人の会話に耳を傾ける。こんな場に突入する程、俺は目立ちたがり屋じゃない。

「どうしてここまで弱くなっている!?」

「受験勉強をしてたから、かな？」

状況から推測すると、織斑は見下ろされている女子生徒と一戦して見事に負かされたのだろう。かなり無様に負けたのか、女子生徒は大層ご立腹である。

「……中学では何部に所属していた？」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

それはなんの自慢にもならんて。

でも昔、千冬が家事は弟がやっていると言っていし、確か何かバイトを始めたって事も聞いた覚えがある。だから彼が帰宅部だと言う事も納得できる。

そんな背景を知らなければただの怠け者にしか聞こえないがな。

「―なおす」

「はい？」

「鍛え直す！　ＩＳ以前の問題だ！　これから毎日、放課後三時間、

私が稽古をつけてやる！」

はい、怒り爆発。

周辺住民の方は速やかに避難してくださいね～って言って退散するわけがないか。むしろ周りの連中はドキドキワクワクして見ている。

「え、ちょっとそれは長いような……ていうかＩＳの事をだな」

「だからそれ以前の問題だと言っている！　だいたい情けない。ＩＳを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……悔しくないのか、一夏！」

負けるのは悔しいだろうが、強さに男も女も関係と思うぞ。強い者は強い、弱い者は弱い。それはどの国に行っても同じだ。

「そりゃ、まぁ……格好悪いとは思うけど」

こんだけ見世物にされちゃ、そう思って当然だな。俺だってこんな状態は御免こうむる。

「格好？　格好を気にすることができる立場か！　それとも、なんだ。やはりこうして女子に囲まれるのが楽しいのか？」

「楽しいわけあるか！」

おぉ、織斑の反撃が始まったぞ。

「珍動物扱いじゃねぇか！　その上、女子と同居までさせられてるんだぞ！　何が悲しくてこんな……」

「わ、私と暮らすのが不服だと言うのか！」

バシーン！と竹刀と竹刀がぶつかり合う音が道内に響く。
突然の事で驚いた。それは俺だけじゃなく周りの見物人も同じだったようで場がシーンと静まり返っている。
それにしても織斑はよく女子生徒の突然の攻撃を防げたな。俺だったら間違いなく脳天直撃、病院行きコースに違いない。

「お、落ち着け箒。俺はまだ死にたくないし、お前もまだ殺人犯になりたい年頃でもないだろ？」

へたれ全開だな、おい。反撃も一瞬だったし、もうちょい期待したんだがな。周りの女子も小声で「織斑くんて、結構弱い？」などと言われているし、そろそろ行くとしますか。
てか、織斑は女子と同室なのか。羨ましいなこんちくしょう。

「はいはい、そこまでな。死人とか殺人犯が出られちゃこっちが困るんだよ」
「え？」

パンパンと手を叩くとその場にいた全員が肩をビクッと震わせこっちを見る。まさか全員本気で俺に気付いていなかったのかよ。

「たく、いきなり修羅場を見せつけやがって、面白かったけどよ」

ギャラリーを抜けて織斑の前へと出る。そしてなぜか周りがざわめいている。さらにコソコソと「誰？」とか「なんで男の先生が」とか「まさか侵入者！？」とか、酷いな。
各ＨＲとかで報告してても罰は当たらんと思うぞ！

「知らなきゃ今知れ。俺は白波烈震。今月よりここＩＳ学園に赴任したＩＳの整備士だ。以後、何度も顔を合わすから忘れんなよ」

再び周りがざわめく。「男性の整備士?!」「嘘でしょ」「やだ、カッコいい」などなど半分ぐらいは失礼な事を言っているが、最後の奴、良いこと言った。お前のＩＳは最高のチューニングをしてやろう。

「ほらほら、こんなトコで油売ってる暇があるなら勉強してろ学生共。剣道部員も部活を再開したらどうだ?」

「そう、ですね。さあ皆、部活を始めるわよ!」

声を上げたのは多分剣道部部長だろう。大きな声で他の部員を動かしている。残るは部員以外の生徒共か。剣道部員とは違い動く気配が無い。

「他の連中、剣道部の邪魔なるから用がなけりゃ帰れ」

「えー」

「隅っこで見ててもいいじゃないですか」

「そーですよー」

ギャラリーからブーイングの嵐が起こる。さすが女子の団結力。年上の男である俺に負ける気はないと言った感じでブーブー言っている。

仕方が無い。応じる気が無いならこちらにも考えがある。

「そーかそーか、そんなに剣道部を見学していきたいか。わかった。おーい部長さんよ、見学者が体験入部したいとさ」

「「「「え゛!?」」」」

「え?　本当ですか」

この部長、武道をやっている割にはノリがいいな。こちらの意図

を即座に理解して話を合わせて来ている。すぐにギャラリーの人数を数え、部員に言って防具を出すようにと指示を出しているのだから。

それを見たギャラリーは

「わ、私、他に用事があるので」
「右に同じ」
「左に同じ」
「私達も！」
「し、失礼します！！」

と、１０秒もしない内にこの場からいなくなっていた。言っておいてなんだが、そんなに剣道をやりたくないか。少し剣道部に悪い事をしてしまったな。

「人気者は辛いな」
「そんなんじゃないと思いますけど」

未だに座り込んでいる織斑に言うと、うんざりしていた。さて、漸く本題に入れるな。
その前に断りと謝罪をしないと。

「あー、部長。ちょっといいか？」
「はい？　なんですか？」
「さっきはすまなかった」

呼び寄せた部長を前にして頭を下げる。教員が生徒に簡単に頭を下げるなとかお偉いさんに言われるだろうが、そんなの知ったこっちゃない。悪い事をしたら謝る、人として常識だろ？

時と場合によるが。

「え？　あ、あのやめてください。なんで先生が頭を下げるんですか？」

「いや、少なからず、ショックは受けたと思ったんだが。剣道部を使って人払いをしたのだから」

「あ」

あそこで本気で体験入部する生徒が一人か二人程居ればよかったのだが、誰一人残らなかった。その結果が意味する事に気付いていなかったのか、部長は今になって少し悲しそうな顔をしてから苦笑いを浮かべていた。

「あはは、大丈夫ですよ。見ての通り今気付きましたから、それ程気にしていません」

「そうか。とにかくすまなかった。あと、少し隅を借りるがいいか？」

親指で道内の隅を指し示し、部活の邪魔はしないからと付け加えた。織斑がいる時点で部員の集中力を削いでいる気はするが、部長は快くいいですよと言って稽古に戻っていった。

「そんな訳で織斑、あっちに……って、お前稽古に戻らんのか？」

織斑と隅に移動しようとしたら、なぜか当然と言わんばかりに織斑と戦った女子まで付いて来ていた。こいつは剣道部員じゃないのだろうか？

「わ、私は、一夏に頼まれ、ました」

「何を？」

「ＩＳについて、教えてくれと」
「ふ～ん……で、なんで剣道してんだ？　戦闘技術は必要だが今は関係ないと思うぞ」

織斑の場合、戦闘技術よりも先に基礎知識から始めなければならないだろう。ＩＳを動かせたと言っても今迄まったくＩＳとは関係のない生活を送っていたはずだ。これは昔の話だが、千冬から弟には一切、ＩＳ関係の事には触れさせていないと聞いた覚えがある。だから、織斑はＩＳ学園に来て初めてＩＳの情報に触れたはずだ。
しかも入学してまだ数日。授業をしていたとしても基礎中の基礎しか知らないだろう。

「そ、それは」

言い淀むって事は特に理由はなかったと捉えるべきかな。
彼女の先程からの言葉や行動から見るに感情が先行するタイプの様にも思えるし、なにか咄嗟的に織斑にＩＳについて教えると言ってしまった。そしていざ教えるとなって、何をしていいかわからないから剣道をしたといった所だろうか。

「そもそもなんで織斑はＩＳについて教えてくれって、俺や彼女に頼んでるんだ？　焦らなくても授業で教わるだろうに」

この疑問もメールを送られた時から抱いていた。ＩＳ学園にいれば三年間丸々ＩＳについて学ぶのだ。なにか特別な理由でもなければ焦ることはないはず

「えっと、代表候補生と戦う事になって……」

特別どころか、とんでもない理由が飛び出たぞ。

なんでも、クラス代表の選出で織斑が他薦され、男のクラス代表は嫌と言った女子とクラス代表を賭けて戦う事になってしまったと。さらにその女子がイギリスの代表候補生であると。さらにさらに口を滑らせてハンデはいらないと言ってしまったと。

「……大バカ野郎だなお前は。もう盛大に負けて来い」

「ちょっと!?」

だがこれはラッキーな事態でもある。まさかこんなにも早く、専用機を拝めることが出来るとは思わなかった。

代表候補生とは文字通り、国家代表ＩＳ操縦者の候補生だ。そして候補生であっても専用機を持っている。

「それは冗談としてだ」

しかし、口では冗談と言っているが全然冗談ではないのが現実。代表候補生　ＶＳ　ＩＳド素人。ＩＳを少しでもかじった事がある奴なら全員が全員同じ結果を出す程、結果はＩＳド素人である織斑の負けが見えている。

だが、それを覆す方法がないわけじゃない。

それに瞬殺されては折角のデータ収集の場が勿体無くなってしまう。織斑には相手に本気を出させてもらわないと、そうじゃなきゃ良いデータが得られない。

「勝ちたいか？」

「それは……当然、負けたくない。俺はこんなところで負けていられない！」

思ったより芯がしっかりしている。なにかを思う強い意志があるのか、さっきよりも良い表情だ。人間、何をやるにしても気持ちは大事だ。

「なら俺も最善を尽くしてやる」

人をサポートするのはいつぶりだろうか。

こんな歳になってもワクワクできるもんだ。

俺も最善を尽くしてやる（後書き）

アニメ7話がいけ（ｒｙ

試験が迫っているのに何をしているんだか。
すべてシャルが可愛いからいけないんだ！（マテ

誤字脱字、感想意見などありましたら遠慮なくお願いします。
サブタイトルが間違っていた事に気付き修正しました。

ぶっとんだ機体をよこしやがったな

実に時間と言うものはあっと言う間に過ぎていく。織斑にＩＳを教えてくれと頼まれてから一週間が経ち、月曜日。イギリス代表候補生との対決の日。

空をがむしゃらに飛び回る『白』
優雅に空を舞う『青』

両者の戦いはすでに始まっていた。
始まっていると言ってもまだ１０分が経ったところ。しかも織斑一夏は今日やっと届いたＩＳ＜白式（びゃくしき）＞でただただ、空を縦横無尽に飛んでいるだけだった。
その間、織斑の対戦相手であるイギリス代表候補生セシリア・オルコットが駆るＩＳ＜ブルー・ティアーズ＞の攻撃を間一髪で避ける場面もあれば、受けてしまっている場面もあったが

「ＩＳに乗るのって二回目だっけか？　まぁまぁな動きだな」

俺は空を飛ぶ＜白式＞をアリーナから眺めていた。
周りにはクラス代表選出戦であるにも関わらず大勢の観客がいる。それは一年だけではなく、二年も三年もはたまた教師陣までが『白』と『青』の戦いを見ていた。
その中で何割が織斑一夏という男のＩＳ操縦者を見に来たのか、また何割がイギリスの国家代表候補生を見に来たのか。考えるまでも無く圧倒的に前者の方が多い事だろう。両者を見に来たのは俺ぐらいじゃないだろうか。

「それにしても、イギリスは厄介な武装を開発してるな」

空を舞う『青』は複数。ＩＳは織斑の＜白式＞とオルコットの＜ブルー・ティアーズ＞だけなのだが、二機以外にも空を飛翔しているモノがあった。それは＜ブルー・ティアーズ＞から放たれた四つの自立機動兵器が織斑を囲むように飛んでいた。

「事前情報が何も無かっただけに、これは辛い」

そもそも、この戦いは織斑には不利な条件が多かった。半分以上は織斑自身のハンデいらない宣言の所為でもあるのだが、まずは相手の情報が一切なかった。

―で、相手はどんなＩＳを使うんだ？

二日前を思い出す。ＩＳの基本を叩き込み終えて漸く本題であるクラス代表選出戦に向けての作戦会議を始めた時の事だ。

最初に相手を知っておく必要があると織斑に聞いたのだが帰って来た答えは「わかりません」と。

まぁ、期待はしていなかったさ。

「専用機のデータはガードが厳重だからな。俺の方でも調べたが、まだ捕まりたくないから諦めた」

「捕まる！？」

「わからないもんは仕方が無い。敵さんの情報は実戦中に得るしかないな」

敵の情報がないだけで織斑の勝率が下がってしまうが、俺はまだ命を手放す気は無いのでここは織斑に頑張って貰う事にしようとこ

の時は思ったのだけど、その必要はなかったようだ。

セシリア・オルコットは自ら戦闘中であるにも関わらず＜ブルー・ティアーズ＞の機体説明の講演をしていた。それもご丁寧にアリーナ全体に聞こえるようにして。ある意味国家機密クラスの事をそんなにベラベラと喋ってしまって大丈夫なのだろうか？

そんな事、俺が気にしてもしかたがないか。

その講演によると＜ブルー・ティアーズ＞は特殊装備であるフィン状のパーツに特殊（ＢＴ）レーザーの銃口が付いている自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』を積んだ実戦投入一号機なのだと。だから機体名にも同じ名前がついているそうだ。

「実戦投入機ってイギリスは候補生になんちゅー機体を与えてんだよ」

比べて織斑のＩＳ＜白式＞は、今日初めて起動した。

これが二番目の不利な条件。

織斑はこの一週間ＩＳに乗れなかった。さすがに実戦をやるのだからＩＳの訓練は必須なので織斑の専用機―政府から専用機を渡すとは通達されていた―が来るまでは＜打鉄＞を代用しようと使用許可願いを出したのだが、どういう訳か却下された。

そしてようやくお目見えしたのが今日、さらに言うなら数十分前である。おかげで調整その他諸々が出来ずに＜白式＞は未調整のまま空へと上がった訳だ。

「そろそろ３０分か」

アリーナの巨大掲示板に表示されている時間を見てから、空中に

いる二人を見た。
オルコットは無傷に近い状態で、今だって「褒めてさしあげますわ」などと言って余裕の笑みを浮かべている。対して織斑は所々の装甲は欠け、慣れぬ空に翻弄されていた為か息が荒い。だが、開戦当初よりも安定して滞空している。
そしてどう見ても負けが濃厚なこの場面で、織斑は笑っていた。ようやく空を飛ぶという感覚に慣れた感じだ。
それを見て俺も口元を釣り上げる。

「ここからだな」

イギリスの代表候補生、笑っていられるのも今の内だぞ。織斑はまだ『初期化（フォーマット）』さえ終わっていないのだからな。

「はあぁぁ……。すごいですねぇ、織斑くん」

ピットでリアルモニターを見ていた山田真耶がつぶやく。確かに一夏の戦いぶりはＩＳの起動が二回目だとは思えない程。
しかし、千冬はあまり驚いた様子も無くモニターを眺めていた。

「でも、なんで攻めないんでしょう？」

始まって３０分が経とうとしているのに一夏は攻撃を受けているのにも関わらず、まだ攻撃を返していない。それが真耶には不思議でならなかった。

「大方、誰かの入れ知恵だろうな。最初の数分はＩＳに慣れろとかどうとか」
「入れ知恵、ですか？」
真耶の頭には？マークが浮かんでいるだろうが、千冬の頭にははっきりと浮かんでいた。昔、自分のＩＳを整備していた男の顔が。
「あの馬鹿者。浮かれているな」
真耶の疑問を他所に千冬は忌々しげな顔をする。
「え？　どうしてわかるんですか？」
「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろ。あれは、あいつの昔からのクセだ。アレが出ると気は、大抵簡単なミスをする」
リアルモニターには今まさに千冬に言われた動きをしている一夏の姿があった。確かに武器を持っていない左手が何度も動いている。
「へえぇぇ……。流石はご姉弟ですねー。そんな細かい事までわかるなんて」
なんとなくそう言った真耶に、千冬はハッとする。
「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」
「あー、照れてるんですかー？　照れてるんですねー？」
その真耶の表情が一瞬あの男と被る。昔にも同じことがあった。
そして同じ事をしたのを思い出す。
「……」

ぎりりりりっ。と真耶にヘッドロックが炸裂した。

「いたたたたたたっ！！」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！　わかりました！　わかりましたから、離し……あううううっ！」

ぎゃあぎゃあと騒ぐ真耶を気にもかけない様子で、ずっとモニターを見つめているのは篠ノ之箒（しののほうき）だった。心なしか、その表情は険しい。

「……」

結局、箒は一夏のＩＳ訓練を手伝うことが出来なかった。原因はいわずもなが烈震のせいである。

放課後、剣道の稽古をつけようとしたら止められ一夏は烈震に、箒は剣道部部長に拉致られる一週間だった。

「（一夏……）」

箒がほんのわずかだけ唇を噛んだとき、試合が大きく動いた。

空を駆けて、オルコットの間合いに入った織斑は周りを飛ぶ『ブルー・ティアーズ』―ややこしいので『ビット』と呼称する―を振り下ろした＜白式＞の武装である刀で撃墜する。そのままＩＳ独自

の無重力機動で残ったビットを回し蹴りをして吹き飛ばした。

「怖いぐらいに絶好調だな」

取り巻き（ビット）のいなくなったオルコットの顔に焦りが浮かび、慌てて備え持つライフルを構えるが、織斑の方が早い。

これは獲ったと思ったのも束の間、オルコットがにやりと笑った。

「！？」

突如として空が爆発した。

してやられた。

さすがは代表候補生と言ったところか。ビットは四機だけではなく、オルコットの腰部から広がるスカート状のアーマーの突起が外れ、動いた。そこから現れたのはレーザーを放つビットではなく、弾道型（ミサイル）だ。

「あっちゃー、直撃かよ」

あまりにも至近距離だった為、織斑の回避は間に合わずミサイルが直撃。爆煙によって織斑の姿は確認できないが、まだ大丈夫みたいだ。理由は簡単、落ちてこないからだ。

「ってか、今になって終わったのか」

まだかすかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。そしてその中心には純白の機体があった。

その姿こそ『初期化（フォーマット）』と『最適化（フィッティング）』が成された＜白式＞真の姿。

「いやー焦った焦った。俺もすっかり忘れてたぜ、あれが初期設定のままだったって事をっ」

ＩＳにはそれぞれ初期形態、一次形態、二次形態といくつかの形態移行がある。さっきまで織斑が使っていた＜白式＞は初期設定を終わらせていない初期形態であり、今空に浮かんでいるのが初期設定―ＩＳが操縦者の特性に合わせた状態―を終えたのが一次形態である。

これでやっとあの機体が織斑一夏専用となったのだ。その証拠に手持ちの武装が大きく変化している。

そしてその形に俺は目を奪われた。

「……雪片（ゆきのひら）、だと？」

細部は違えど、見たことがある。

日本刀の様なその刀身は刀と言うよりは太刀（たち）に近い。まるで人の心に呼応するかのように刀身から光が漏れ出ている。

「悪趣味な事をしやがる」

あれは織斑千冬が使っていたＩＳの専用装備雪片に間違いない。そしてそれを開発したのはこの世でただ一人。だからあれを作ったのはあいつしかいない。

「こりゃ、勝負が決まったな」

空では今までとはまったく違った動きで相手を追う織斑の姿があった。もうオルコットは頼みの綱であるビットが全機破壊され、苦し紛れの攻撃しかしていない。

「織斑の勝ちも見えたし、こっちはかなり良いデータを得られた。素晴らしい一日だな」

現在ＩＳは第二世代が主力だが、各国は次の第三世代の開発を進めている。そしてセシリア・オルコットの＜ブルー・ティアーズ＞はイギリスの第三世代型である。しかも実戦投入機。

さらに織斑のＩＳ＜白式＞

「あいつが作ったとなれば、雪片だけの訳がない」

それはもう世界が頑張っているのを嘲笑うかのように、ぶっとんだ性能のＩＳを作り出してしまう奴だ。武器だけでなく機体の方にも何かがあるに違いない。

「っと、終わるか」

今まさに織斑がオルコットの懐に飛び込み雪片を下段から上段への袈裟払いを放つ。が、その斬撃が当たる前にブザーが鳴り響いた。

「あれ？」

それは紛れも無く決着を告げる音。そしてアナウンスが勝者を決定付けた。

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

あまりの事にアリーナにいた全ての人が、対戦相手のオルコットまでもがポカンと口を開けて驚いている。

「なんで？」と思ったがすぐに何が起こったのか理解できた。

ＩＳの戦闘（バトル）は相手のシールドエネルギーを０にすれば勝ちになる。
そのシールドエネルギーはＩＳの原動力でもあり常に消費していく。
シールドバリアーや操縦者を守る絶対防御―生命維持機能―などもこのエネルギーから起きている。

そして今の戦いは織斑の＜白式＞のシールドエネルギーが＜ブルー・ティアーズ＞よりも先に０になってしまったと言うことになる。

「あの野郎……」

＜白式＞のシールドエネルギーが残り少なかったとは言え、一撃入れるだけのエネルギーは残っていたはずだ。なのにシールドエネルギーが突然０になった。なにか特別な事をしなければありえない事態。

そして俺は、そのあり得ない事態を知っている。

「ぶっとんだ機体をよこしやがったな」

どこかでウキウキしながらＩＳを開発しているであろう奴の顔を思い浮かべ、イラッとした。人にお願いしときながら、さらっとこんなＩＳを開発してしまうあいつが妬ましい。

「今度、マジで拳骨を叩き込んでやろう」

そう心に誓って、まだざわめくアリーナを後にした。

ぶっとんだ機体をよこしやがったな（後書き）

アニメ8話が（ｒｙ

試験迫ってるのにシャルとラウラが可愛くてついつい書いてしまう（ぇ

アニメで動くとヤバイですね。

誤字脱字、意見感想などがありましたら遠慮なくどうぞ。

俺の考えているのは第何世代になるのやら

クラス選出戦の翌日の放課後。

俺は織斑だけをアリーナの観客席に呼び出したはずなのだが、なぜか女子が二名ほど付いてきていた。

一人はいつも一緒にいるのかと思うほど見かけるポニーテールの剣道少女。実はまだ名前を聞いていなかったりする。

そしてもう一人は、先日行われた選出戦での織斑の対戦相手、イギリス代表候補性セシリア・オルコットだ。織斑の話ではかなりオルコットに嫌われていると聞いていたのだが、そんな雰囲気は見あたらない。むしろ好意をもたれているように見えるぞ。

「それで先生、用ってなんですか？」

「ん、あぁ、昨日の試合についてなんだが……」

ざっと女子二人を見る。この話は織斑以外には聞かれたくない話なのだが、なぜ見ただけで睨み返してくる。特に剣道少女。

「あー、俺は構いません」

視線の意図を理解したのかそう言う織斑だが、俺が構うんだ。今から話す内容は＜白式（びゃくしき）＞の特殊能力について。特殊能力というよりも異常能力と言った方がいいかもしれない。＜白式＞は既存する世代に当てはまらないＩＳなのだから。

「まぁ、いいか。んじゃ、三人とも適当に座ってくれ」

アリーナ席に腰を下ろす三人。女子二人は当然の如く織斑の両隣に腰を下ろしている。もうこれは確定と言ってもいいだろう。

ただ、この学園は織斑以外が女子なので、この二人以外にも織斑に好意を抱いている奴らはいるはずだ。倍率がクソ高いなぁ、頑張れ女子共。

「さて、昨日はご苦労さんだったな。二回目の起動にしては十分な動きだったぞ」

「あ、はい、ありがとうございます。ただ、あんなに息巻いて負けてしまったけど」

「負け犬だな」

グサッと織斑の胸に刀を突き刺す剣道少女。容赦ねぇな。確かに試合中色々と持ち上げる発言を聞いた、「最高の姉さん」だとか「家族を守る」とか聞いててこっちが恥ずかしくなったぞ。

「その負けた原因だが、わかるか？」

「いえ。ただ、一気にエネルギーがなくなったとしか分からなくて、千冬ね……じゃなくて織斑先生は武器の特性を理解しないからだって言ってたけど」

あの能力は千冬のＩＳと同等の能力なのだから気付かない訳がないか。ただそこにも疑問はあるが、それは後回しだ。

「あれにはちゃんとした原因がある。通常ではありえないがお前の＜白式＞ではやれるようだ」

「通常ありえないって？」

「単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）って知ってるか？」

「いや、知らな「そんな事ありえませんわ！！」」

織斑の返事を遮ってきたのはオルコットだった。さすがは国家代表候補生、単語一つだけであり得ないという事がわかったようだ。

「単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）は通常は第二形態から発現するものですわ。一夏さんは第一形態だったはずです。でたらめを言うのも」
「あるんだよ。第一形態でも発現する事ができるでたらめなＩＳがな」
「そんなＩＳがあるなんて聞いたこと」
「世界は広いんだ。お前の知らないところで開発されてんだよ」

ただ、今のところ＜白式＞と同等の機能を持ったＩＳは俺の知る限り一機（アレ）しか存在しない。
現在世界は第三世代の開発で精一杯でそれ以上の機能開発には至っていないはずだ。ただ、あの野郎がホイホイと生産していたら話は別なんだけどな。

「あのー、単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）って？」

置いてきぼりを食らった織斑はおずおずと手を挙げて質問してきた。メインの事をすっかり忘れていた。

「単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）ってのは操縦者とＩＳの状態が最高になった時に発動する特殊能力の事だ」
「えっとそれは確か、ＩＳには意識に似たようなモノがあって、ＩＳ自身が操縦者を理解して自分に合わせようとしてくれてるからＩＳは道具じゃなくてパートナーとして考えるんでしたよね」
「よく覚えてたな、その通りだ。でだ、どう言う訳か＜白式＞は初回起動にも関わらずお前の気持ちに応えて単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）を発動したって訳だ」

この点も通常ではあり得ない事態。初回起動で単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が発動した事例など聞いたことがない。千冬でさえ、数回ＩＳに乗った

後に発動させたのだ。

「それで、具体的にはどんな能力なんですか？」

「完全に使いこなせればチート級の能力だぞ。シールド無効化攻撃、それがお前のＩＳ＜白式＞の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）だ」

「シールド無効化攻撃……ってなんだ箒？」

おいおい、名前のままなんだからわかるだろ。

織斑は隣に座る剣道少女から説明を受けている。しかしそこにオルコットが割り込み、なんか言い争いが始まった。

「今私が一夏に説明しているんだ。邪魔をするな！」

「あなたの説明は分かりにくいので、変わって私がわかりやすく一夏さんに説明してさしあげますわ」

「私の説明のどこが分かりにくいんだ。お前の方が！」

「なんですって！！」

どんどん激化していく言い争いから織斑がなんとか避難してきた。

二人は隣から織斑がいなくなった事も忘れ言い争いを続けている。

その光景を横目に織斑とのＩＳ講義を再開した。

「あっちは放って置いてだな、いいかシールド無効化攻撃と言うのは名前の通り操縦者を守るためにＩＳ周囲に張り巡らされている不可視のシールドを貫通し、操縦者本人にダメージを与える攻撃の事だ」

「それって簡単に死ねるんじゃ？」

「安心しろ。操縦者本人にダメージを与えると言ってもその手前で絶対防御という操縦者の生命を守る機能が発動するんだ。ただ、絶対防御の発動にはシールドエネルギーが極端に消費されちまう」

それは半分以上ごっそりと消費してしまう。人の命を守るのだからそれぐらい消費してしまうのは仕方が無いことなんだがな。

「って事は、ＩＳの戦闘はシールドエネルギーが０になった時点で終了となるから、絶対防御が発動してしまうと負ける確率が増えるって事ですか？」

「理解が早くて助かる。まさにその通りだ。そして、お前のシールド無効化攻撃はかなりのリスクもある」

「え？」

これ程までに高性能な機能をなんのリスクもなしに使えるはずがない。だから最初に言ったのだ「完全に使いこなせれば」と。

完全に使いこなせれば織斑と＜白式＞は間違いなく最強の名を手にする事ができるはずだ。この力を使って最強の座についた奴が過去にいるのだから。

「あれは莫大なエネルギーを使うんだ。それは自分のシールドエネルギーまでもエネルギーに転化してな」

「え゛！？」

「だから発動したらすぐにケリをつけないと、何もしないまま終わる事になる。昨日の試合が良い例だな」

昨日、＜白式＞の武装、雪片（ゆきのひら）が光を帯びていた。それが単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が発動していた証拠のはずだ。だとしたら第一形態移行終了と共に発動していたと言うことになる。そこからオルコットに斬りかかるまで少し時間があった訳だから、発動後すぐにエネルギーが０になってしまった訳ではないのだろう。

それでも短時間でエネルギーが０になってしまったのだから、あの単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の扱いは難しい。

「今後、あれを使おうと思うなら最後の一撃必殺としてしか使った方がいいな。あれを組み込んで戦おうとは思わないほうがいい」

シールドエネルギーを管理をする難しさは、戦闘スタイルによって変わってくる。

オルコットの＜ブルー・ティアーズ＞の様な中・遠距離型であれば相手と距離を開けて戦う為、管理は容易なのだが、織斑の＜白式＞みたいな近接型だと敵に接近して戦う為、敵の動き、攻撃の軌道など沢山の情報を見て戦わなければならない。

そこにエネルギー管理が加わると並みの操縦者では管理が追いつかなくなってしまう。だから単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が自身のシールドエネルギーまでも使うタイプだと大半が一撃必殺として使う事が多い。

しかし織斑の姉、織斑千冬はシールド無効化攻撃を攻撃の型に組み込む戦い方だった。そして圧倒的な攻撃力をもってモンド・グロッソを優勝、最強の座に着いた。その時の戦闘データ整理をやっていた時、あいつの処理、管理していた情報量に驚かされた事があった。何度計算し直した事か、本当に我が目を疑う情報量だったぞ。

「そうですね。ただでさえ、まだＩＳを使い切れていないから」

基本は大事だが、焦る必要はどこにもない。織斑（こいつ）の場合、色々な手順をすっ飛ばしすぎている。一番最初の戦闘が生徒同士による模擬戦ではなく代表候補生とのクラス代表選出戦とか異常事態だと誰も思はないのだろうか？

「焦るなよ。これから先、専用機持ちと戦うのはかなり先だろうしよ」

そう立て続けに学園でも珍しい専用機持ちと戦うことなんてありえるはずがないと思っているのだが、なぜか織斑は黙って明後日の

方を向いている。
この仕草、あいつと似ている。やはり姉弟だなって事よりも。

「……もしかして、戦う予定でもあんのか？」
「えっと、クラス代表になりました」
「……」

クラス代表とはそのままの意味でクラス長の様なモノで生徒会の会議やら委員会に出席などする役割の事だ。ただこのＩＳ学園ではもう一つ役割があり、それがクラス対抗戦（リーグマッチ）の代表者である。
そして織斑とオルコットの先日の戦いはこの代表者を決める戦いだったはずで、織斑が負けたのだ。ならばオルコットが代表者のはずなのだが。

「なんかセシリアが代表を辞退して」
「お前になったと。……なんつーか、不幸だな。お前の辞退は？」

首を横に振る織斑。女子の辞退は認めて織斑の辞退は認めないとか見事に嵌められてないか？

「まぁ、頑張れ。さてと、俺の用事は以上だ」
「あ、色々と、ありがとうございます」
「また困った事があったら連絡しろよ。とりあえずあの二人をどうにかしろよな」

まだ言い争いが終わらない女子二人に目を向ける。あれを鎮めるには骨が折れそうだ。現に織斑は溜息を吐いてゲンナリしている。

「……はい、なんとかします」
「ハハハ、頑張れよ。じゃぁな」

織斑の肩を軽く叩いてアリーナを出た。
そのすぐ後に背後から「一夏ぁ！」やら「一夏さん！」やらと大声で織斑が大変な目に合いそうな声が聞こえてきたが、その時織斑がどうなったかなど俺は知らない。助けを求める声が聞こえた気もするが何も知らない。

その夜、ＩＳ整備格納庫で先日の織斑とオルコットの試合のデータを整理していた。モニターには＜白式＞と＜ブルー・ティアーズ＞の数値データが表示されている。
データを見比べてわかった事だが特殊機能ですでに異常だと思っていた＜白式＞はスペック上でも＜ブルー・ティアーズ＞を上回っていた。
確かに＜ブルー・ティアーズ＞は第三世代型とは言え開発初期の機体だから第二世代後期の機体と機体性能に大した差はないと言える。

第二世代型と第三世代型の違いは、第二世代は後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれたモノであり、第三世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標としたモノである。そして第三世代は未だ実験機の域を出ない為、現在の最も多く配備されているのは第二世代型となっている。

「あの野郎＜白式＞なんてものを送ってきやがって、人に発破をかけてるとしか思えないぞ」

そして＜白式＞であるが、第一形態時から単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が使える

ように作られている所から見ても第三世代とは言い難い。呼称するならば第四世代型と言っていいだろう。推測だが第四世代型のコンセプトは装備の換装無しでの能力獲得を目指したモノであると考えられる。

新たにモニターをもう一つ表示する。

モニターには先に表示されている＜白式＞や＜ブルー・ティアーズ＞、さらには＜打鉄（うちがね）＞、＜ラファール・リヴァイブ＞とも違った形をしたＩＳが表示されていた。

「第四世代か……なら俺の考えているのは第何世代になるのやら」

開発状況５０％。まだまだ完成には程遠い機体のデータを眺める。

このＩＳの開発こそが篠ノ之束に依頼された仕事であり、世界を旅するはめになった原因でもある。

「今更、考えたって仕方がねぇな。さてと、帰って寝ますか」

とりあえず、今日は平和だった。

明日も明後日も明々後日も、いやもう毎日平和であってほしいものだ。

俺の考えているのは第何世代になるのやら（後書き）

アニメ残り2話か。
今更ですけど、原作を主軸に進めています。

原作では断然シャル派だったのだが、アニメでラウラに揺らいでしまったｗ

誤字脱字、感想意見などがありましたら遠慮なくお願いします。

あいつはどこ行ってもトラブルだらけだな

五月。

俺がＩＳ学園に来てから一ヶ月が経つ。

この一ヶ月、平和を願っていた俺を神は見放し、毎日散々な日々を送っていた。

同じ整備員である穂村彩流（ほむらさいる）には扱き使われるし、一年一組の副担任　山田真耶（やまだまや）という女性がいるのだが、ドジなのか狙っているのか知らないが、そのドジに巻き込まれる事が多々とあり、それにより千冬に睨まれる事数回と本当に散々な目にあった。

そんなある日、俺は第三アリーナへと来ていた。

観客席で寝そべって空をボーっと眺めていると、グラウンドから聞き慣れた声が聞こえてきたのでゆっくりと起き上がり誰なのかを確認すると。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合設定用に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな。ＩＳ操縦もようやく様になってきたな。今度こそ……」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。このぐらいできて当然、できないほうが不自然といものですわ」

一ヶ月経つと言うのに未だに名前を知らないポニーテールの剣道少女と、一ヶ月経ってもまだ学園内の話題の対象である織斑一夏。

そして、あいかわらず高飛車な物言いのイギリス代表候補生　セシリア・オルコットという、学園内で定番と化した組み合わせであった。

どうやら来週から始まるクラス対抗戦（リーグマッチ）に向けて最終調整を行うよ

うだ。
面白そうだからこのまま見ていよう。
「ふん、中距離射撃型の戦闘法（メソッド）が役に立つものか。第一、一夏のＩＳには射撃装備がない」
この一ヶ月、女共に扱き使われていただけではない。
しっかりと、各ＩＳについて調べていた。あのポニー剣少女―ポニーテールの剣道少女の略―が言うとおり織斑のＩＳ＜白式（びゃくしき）＞には射撃武器が一切装備されていない。
普通、ＩＳには機体ごとに専用装備が存在する。ただ『初期装備（プリセット）』だけでは不十分なので『後付装備（イコライザ）』というものがある。
例えでいうならイギリス代表候補生　セシリア・オルコットのＩＳ＜ブルー・ティアーズ＞の初期装備が６基の遠隔射撃武装『ブルー・ティアーズ』であり、後付装備が巨大な特殊レーザーライフルや近接武装のショートブレードである。
さらにＩＳには後付装備の為に『拡張領域（バススロット）』なるものがある。これは装備できる量は各機のスペックによるが、最低でも二つ後付けできるように設けられている。
だからどんなＩＳであっても普通ならば後付装備として色々な武装が装備できるはずなのだが、織斑のＩＳ＜白式＞には拡張領域が無く、さらには初期装備の書き換えは不可能となっていた。よって＜白式＞の武装は近接ブレードである雪片―織斑が言うには弐型らしい―のみとなっている。
少し前に織斑からなぜ拡張領域がないのか質問された事があった。俺もその時に＜白式＞に拡張領域がない事を知ったのだが、原因はすぐにわかった。
拡張領域全てが単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）によって埋まっていたのだ。だから

初期装備の変更も不可能であり、後付装備もできないと言う訳だった。調べなくても異常だとわかっているのだが、調べれば調べるほど＜白式＞は異常過ぎるＩＳだと再認識してしまう。

「絶対にまだ何かあるはずだ。あいつがこれだけで終わらせるはずがねぇ」

＜白式＞はまだ第一形態だ。もしかしたら第二形態でまたぶっとんだ性能を発現する可能性がある。そう思うと悔しいがワクワクしてしまう。俺も一介の技術者だ、やはりＩＳの進化には興味が尽きない。

「貴様、どうやってここに……」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

考察にふけていたら女子二人の声を聞き、再びグラウンドに目を向けると三人から四人へと増えていた。

「はんっ、あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題無しね」

自信満々に言い放ったのは、左右それぞれを高い位置で結ばれ肩にかかるか、かからないかの髪に小柄な体格で、ピンク色のＩＳスーツを着ている女子だった。

彼女は四月の半ば辺りでＩＳ学園に転入してきた中国代表候補生凰（ふぁん）鈴音（りんいん）である。彼女の口ぶりからすると、どうやら織斑の知り合いのようだ。これまた、織斑が苦労しそうな感じがビンビンするぞ。

「いつも思うけどなんでＩＳスーツってあんなに目のやり場に困るデザインをしてんのかね？」

ＩＳスーツとはＩＳを装着する際に基礎となるボディスーツである。ＩＳは操縦者の生態電流を感じ取って動作を行うため、肌の露出が多いデザインなのだ。だからＩＳスーツはどこか水着の様に見えてしって女性の身体のラインがまる分かりなのだ。

男にとったら眼福なのだが、昔それで何度と千冬に「いやらしい目で見るな」とどつかれた事か。何度「れっくんのえっち～」と束にからかわれた事か。お前らがそんな格好で居る方が悪いんだよと言ったらフルボッコにされたのは良い思い出だ。

「それにしても、あいつはどこ行ってもトラブルだらけだな」

女難の相でも出ているんじゃないか？

ここ最近の問題には必ず織斑が関わっている。関わっているというか、巻き込まれているが正確かもしれない。ただ、今の状況は織斑が作り出したようだ。

聞こえてきた話を整理すると、織斑と凰が何かを約束したけど、織斑はその約束の意味を取り違えて覚えていた。それに対して凰は謝罪を求めているが織斑は謝る気はないと。

「あったまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね！？」

「だからどう違うか説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来ているんでしょうが！」

そうまでして説明したくない約束ってのはいったいなんなんだ？

約束とは普通、双方の同意によって行われるはずだ。こりゃ約束する時、曖昧な約束をしたな。そうじゃなきゃ約束一つでここまで問題になるはずが……

「人の事は言えないか」

ないと思いながらも、自分がやらかしている事を思い出した。

モンド・グロッソに優勝したらなんでも聞いてやる。昔、千冬に言った言葉だ。そしてあいつは見事にモンド・グロッソに優勝して俺にあるお願いをした。結局その願いは叶える事が出来なかったんだ。

少し昔の事を思い出していると鳳が織斑に向けてビシッと指をさしていた。

「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦（リーグマッチ）、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるって事でいいわね！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」

そしてまた勝率の低い戦いを挑むと。俺としては嬉しい限りだ、これでまた専用機のデータを得られるんだから。前回の＜ブルー・ティアーズ＞は使えるデータが少なかっただけに今回の中国のＩＳには少し期待したい。

「って何ですぐに言い争いになるかね？」

話が決まったのならすぐに別れればいいのに、あーだこーだと言い合っている。鳳は織斑に向かって「馬鹿」やら「朴念仁」やら「間抜け」やらとてか馬鹿を連呼しすぎだ。そんなに連呼したら誰だってカチンと

「うるさい、貧乳」

ほら、カチンと地雷を踏んだ馬鹿がいるじゃないか。

ドガァァンッッ！

突然の爆発音と衝撃でアリーナが微かに揺れた。爆音と衝撃をもたらしたのは額に青筋を浮かべる凰。その右腕は指先から肩までＩＳ装甲化していた。

そして織斑の右後ろにある壁が凹んでいる。凰がやったのには違いないが、彼女の右腕は壁に届いていない。別の方法で壁に何かを叩き付けたのだろう。

「……一瞬だったが、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が見えたな」

音や衝撃に驚きはしたが、見るものはしっかり見ているのが俺クオリティー。

凰は代表候補生なだけはある。織斑が地雷を踏んでから一秒もしない内にＩＳを部分展開、即攻撃行動に入ったのだ。その時間は１０秒もない、相当な訓練を積んでいると言える。

凰に勝つにはオルコット以上に大変かもしれない。

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね。いいわよ、希望通りにしてあげる。……全力で叩きのめしてあげる」

鋭い視線を織斑に送ってから凰はグラウンドから出て行った。勝つのは大変と言うか９９％無理だな。

改めて凹んでいる壁を見る。特殊合金製の壁を凹ませる威力はどう見てもパワータイプであると考えられる。そして何か隠しだまを持っているのは間違いなさそうだ。

「こりゃ、楽しみだな」
「へー、何が？」
「何がって、織斑と凰のバト……る」

急に周りの温度が下がる感覚に襲われながら、額からは嫌な汗が流れる。ゆっくりと後ろを振り返ると、そこにはとてもにこやかに笑う同僚、穂村彩流が阿修羅と化していた。手には使い慣れたペンチを持ち逆の手にペチペチと打ち付けている。

「仕事さぼってなにしてるのかなぁ？」
「ま、待て。サボってる訳じゃないぞ。第二アリーナの調整は終わったから、少し休憩しているだけだ」

今日、整備員である俺と彩流には来週行われるクラス対抗戦（リーグマッチ）で使われるアリーナを大会用に調整する仕事があった。
二人だけでやるという訳ではなく俺達二人が指揮を執る形で、彩流は第一アリーナを、俺は第二アリーナを担当する事になり、残りの第三アリーナは二人で調整する予定だった。
そして俺は第二アリーナの調整が思いの外早く終わったので、彩流を待つ間休憩しようと第三アリーナ（ここ）で寝ていた訳だ。
だから俺は悪くない、はず。

「へ～、時間を見ても休憩してたと言えるかな？」
「あ？……げっ、もうこんな時間か！？」

巨大電光掲示板の時計は午後5時を指している。俺が第二アリーナの調節を終わらせたのが3時だから2時間ぐらい休憩していたと言うことになるか。そりゃ俺自身でもサボっていると思えるな。ここは素直に謝るしかない。

「あー、その、なんだ。マジで悪かった」
「……悪いと思うんだったら今日、付き合いなさい」
「そんなんでいいのか？」
「いいの！」

おもいっきり怒鳴り声を上げられたが、この付き合いなさいというのは交際という意味ではなく、飲みに付き合えという意味だ。
穂村彩流という女性は見た目に反して酒豪である。大仕事を終えた後は必ず酒を飲むのが習慣らしい。
前から数回ほど、飲みに付き合った事がある。俺は酒には弱くないと思っているのだが、いつも終盤の記憶がなく二日酔いにあっている。それだけ飲まされて潰されているのだろう。

「それじゃ夜、準備しておいてね」

彩流は怒ってますオーラを若干しまい、嬉しそうな表情を浮かべてアリーナから出て行った。
準備するのはもちろん俺の部屋でだ。今回は全面的に俺が悪いし、あいつ好みの酒とつまみを揃えるとしますか。

そして、その日の酒盛りの記憶は毎度の如くすっ飛んでいましたとさ。

あいつはどこ行ってもトラブルだらけだな（後書き）

鈴登場！

アニメでの「そっか、やっぱりそっかぁ」って言う、あの目がたまらなく好きな俺は異端でしょうか？ｗ

誤字脱字、感想意見などがありましたら遠慮なくお願いします。

ふざけた真似しやがって

クラス対抗戦（リーグマッチ）当日。

第二アリーナには二機のＩＳが空に待機していた。一人は噂の絶えない世界で唯一ＩＳの使える男、織斑一夏（おりむらいちか）。その身に纏うのは織斑の専用機＜白式（びゃくしき）＞。

その織斑に対峙するのが噂の転入生、中国の代表候補生　鳳鈴音（ファンインイン）である。専用ＩＳは＜甲龍（シェンロン）＞。公式公開されている情報などを見るに＜甲龍＞は第三世代型で燃費と安定性を第一に設計されている機体のようだが、やはり＜白式＞と比べるとそのスペックは＜甲龍＞の方が低い。

「総合的に見ても織斑の負けが濃厚だよな」

スペックが高くてもそれを扱いきれていなければ意味が無い。織斑はまだ＜白式＞に乗って日が浅いし、ＩＳにもやっと慣れたといった所だ。それに比べて鳳は代表候補生になってどれぐらい経っているかは知らないが、織斑よりはＩＳを使っている時間は格段に長い。

「＜甲龍＞か、見た目からして近・中距離型といったところか？」

手持ちの武装は大型の青龍刀一と呼んでいいかわからないほど異形な形の刀一が二つだけ。それだけならば脅威でもなんでもないのだが、＜甲龍＞には両肩の横に浮かぶ棘付き装甲、いわゆる非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）（スパイク・アーマー）が存在する。棘付き装甲なので見た目で判断すると、打突もしくは突進系の武器になるのではと思うのだが、球形である装甲の中心部に円形の凹みがあるのが気になった。

「単なる飾りとは思えないし、ありゃなんかあるな」

その答えはすぐにやってきた。

戦いが始まって１０分が経過した。

前回のオルコットとの戦いの時も思ったが、織斑の潜在能力には驚かされる。相手はただの訓練生などではなく国の代表候補生で全てにおいて織斑を圧倒しているにも関わらず、織斑はそれに負けじと喰らい付いていた。

今だって、いつ誰に教わったかは知らないが三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）なんていう技術を駆使して凰の攻撃をどうにかこなしている。

「斬り合いは拮抗してるか。ここは一旦距離を置いた方が……あら？」

織斑も同じ事を考えたのだろう。消耗戦になると思って距離を開けた途端、織斑は何かに当たったかのように吹き飛ばされた。なんとか体勢を立て直した織斑だが、何が起きたのかわかっていない。そのまま、二撃三撃と何かに殴られ地表に打ち付けられてしまった。

「これまた厄介なモノを」

対戦中だと何が起きているのか把握するのに時間がかかるだろうが、今俺がいるのは観客席だ。織斑は痛い目にあっているが、俺には何の害もないので落ち着いて状況を観察できる。だから織斑が吹き飛ばされた何かがよくわかった。

衝撃砲。

それが凰が織斑に向けて放っているモノであり、非固定浮遊部位の正体である。原理は空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出すモノで、砲弾だけでなく砲身さえ見えない砲撃だ。

何が厄介かと言うと砲弾が見えない事よりも砲身が見えない事にある。砲身が見えなければ何処を向いていて撃ち込まれるか予想が付かない。しかもあの衝撃砲は斜角制限がないようで全方位へ問答無用で撃ち込む事ができるようだ。

「これで織斑が勝つ可能性は限りなく0に近づいた訳だ。勝つには単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）をぶちかまさないとならないが、あの衝撃砲を突破しないと話しにならないと」

そうなると一瞬で間合いを詰める瞬時加速（イグニッション・ブースト）が必要になってくる。瞬時加速はその名の通りエネルギーを圧縮させてから放出し一気に加速するの事だ。特に近接戦闘型には重宝される技能だ。

それを織斑が知っているかは謎だが三次元躍動旋回を知っているのだから、使えるとは思う。問題は使いどころだ。

織斑は何かを狙っている。自分が今出来ることをしっかりとわかっているから、その出しどころを探している感じだ。そろそろ勝負を仕掛けに行くだろう。

そう思った時だ。突然、第二アリーナ全体に衝撃が走った。

「!?」

突然だった、本当に突然アリーナの遮断シールドを何かが突き破ってステージ中央に着弾した。そこには黒煙が上がっている。

「なんだ!?」

アリーナ全体に警告音が鳴り響くと観客席を守る様に防御壁が展開されてステージが見えなくなってしまった。ステージ側も気になるが、今俺がやるべき事は生徒の避難誘導だ。だからアリーナの出

入り口に向かったのだが、そこでは予想外の事態が起きていた。

「なんで?!なんで!!」
「どうして!!」
「ダメ、ビクともしない」
「おい、何してんだ!!」

出入り口ではアリーナから逃げようとする生徒がいるのだが、一向に出て行かない。人をかき分けて出入り口へと辿り着くとそこには閉ざされた扉があった。

「おいおい、なんでロックされてんだよ!?」

アリーナの扉は手動式ではなくシステムによって開閉を制御されている扉だ。その扉は緊急事態にも関わらず『Ｌｏｃｋ』と表示されていた。

俺はすぐに第二アリーナを制御しているメインピットに携帯端末を使って通信を行った。

「こちら観客席にいる白波だ。出入り口がロックされてる、さっさと解除してくれ」
『し、白な……ぶ……ですか』

この声は山田先生だな。雑音混じりで聞き取り難いが声に焦りがある。

「おい、聞こえるか?扉のロックを外してくれ」
『……が……ル４……』
「おい山田先生?!　おい!!　……ちっ切れやがった」

使っている携帯端末は最新機器のはずで昨日まで雑音などなく使えていたが、通信が切られてしまった。あちらが切ったとは考え難い。となると、考えられるのは強力なジャミングがかけられているかもしれない。

「せ、先生、私達ここから出られないの？」

人の感情は周りに伝染し易い。一人が嬉しくなれば周りに笑顔が生まれる、一人が泣けば周りは悲しみに包まれる、そして今一人の不安の言葉で周りに恐怖が生まれている。

「（まずいな。この人数で混乱されたら、いくら俺でも対処できねぇぞ）」

第二アリーナにいた観客は注目の対戦カードでもあった為、満席に近い状態でその多くは一年と二年だ。不安な一言を言ったのは一年の女子で今にも泣きそうな表情だ。今泣かれたらそれさえも連鎖してしまう。だから俺はその子の頭を優しく撫でた。

「え？」
「安心しろ」
「……」

人は人の温もりを感じることで安心できる。昔、怒り狂ったとある女性二名もこの方法で落ち着かせる事が出来た。それだけにこの頭を撫でて優しく言葉をかけるは効果絶大だと思っている。現に女子生徒は泣きそうな表情から少し落ち着いた感じになっていた。

「（さて、一人を落ち着かせてもこの人数だからな。さっさとロックを解除した方がいいんだが……その間に発狂されない可能性が無

いわけがないか。どうする）」
「先生、なにか私達に出来る事はありませんか？」

生徒を落ち着かせるにはどうすればいいかを思案していると数人の生徒が現れた。リボンの色から三年生だとわかる。
そこで俺は気付いた。何も全てを一人でやる事はないと。

「助かる。それなら、不安がっている奴等のそばに居て何でもいい、明るい言葉をかけてやってくれ」
「それだけでいいんですか？」
「それだけでも重要なことだ。頼む」

不安な時は、不安な事しか頭に浮かばない。それを無理矢理ではあるが別の人から明るい話をしてもらえれば少しでも不安な気持ちを紛れさせることは出来る。それを三年生達にやってもらう事にした。

「わかりました。みんな行こう」

一人の号令で三年生は一、二年生の傍へと駆けて行った。それを見届けて俺もようやく自分の成すべき事に集中できる。

「さてと」

俺はポケットから通信に使っていた携帯端末とは違う端末を取り出し、扉に接続した。

「ふざけた真似しやがって。さっさと片付けてやる」

システムクラック開始だ。

本職様をなめんじゃねぇぞ。と息巻いた時だ、端末からピーと何かを知らせる音が鳴った。それは俺をとても吃驚させる知らせだ。

「ロック解除だと？」

俺の言葉の後に全ての扉が音をたてて開かれた。それを見た生徒達から歓喜の声があがる。

「開いた！　みんな開いたよ！！」

「やったぁ！！」

「みんな、落ち着いて！　一年生から順に避難しましょう！！」

三年生の誘導の下、次々と生徒達がアリーナから避難していく。それを俺は最後の一人が出るまで見届け、最後に出た三年生に「先生も早く」と言われたが、最後にチェックして行くから先に行けと言って行かせた。

「……意味がわからん」

そしてガランとした観客席を眺めて俺はポツリと呟いた。

本当に意味がわからないかった。なぜロックを解除したのか。システムクラックされては困る理由があったのだろうか？いくら考えても理由はわからない。とにかくこちらとしてもいざと言う時の奥の手を使わずに済んだのだ。

あとはステージ側が無事に解決してくれる事を願うだけだ。

ふざけた真似しやがって（後書き）

不定期すぎる更新で申し訳ないです。

原作を知らないとわかり辛い内容ですね。
烈震がＩＳに乗れないから、乗れてたら一夏と協力して～なのだけど乗れないからｗ
完全に裏方さんです。

お気に入りが１００件超えていた事に驚きました。
本当にありがとうございます。不定期ではありますが、これからもよろしくお願いします。

「烈震、おつかれ～」

謎の襲撃から数時間後。
色々な聴取や調査を終えた俺は自室へと戻ってきて、ベッドで寝そべっていたら彩流が部屋にやってきた、片手に焼酎を持って。

「部屋へ帰れ、酔っ払い」
「ひどっ！？　酷いよ烈震、頑張った彩流さんをちょっとは労ってくれてもいいじゃんかよぉ」
「あーはいはい、頑張りましたねー。そんじゃおやすみ～」

と言って扉を閉めようとしたらガシッと彩流が扉を掴んでそれを阻止してきた。女だと思って侮るなかれ。彩流は毎日、ＩＳを整備しているだけあって華奢な身体つきの癖して純粋な力は俺と互角だったりする。おかげで本気で扉を閉めれないでいるのは男として悔しい限りだ。

「烈震、態度冷たくない？」
「さすがに今日は疲れたんだ。明日、ゆっくり付き合ってやるから今日は勘弁してくれ」

アリーナから全員無事に避難させたあと俺はすぐにメインピットへと向かおうとしたが、どういうわけかメインピットへ続く扉がＬｏｃｋされたままだった。メインピットに居るのは教師が数名、生徒が二名との事だったので教師がいるなら無理に行くこともないかと思い、避難した生徒のアフターケアをしに向かった。
その後、襲撃者が撃退された事がわかり第二アリーナに居た全員

が聴取され、つい先ほど開放されたと言うわけだ。

「そんな事言っていいのかな？」

とても意地の悪い顔をして持っている焼酎瓶を逆さまにして見せてきた。その瓶の中には液体は入っておらず、何か紙の様なものが入っている。

「なんだそれ？」

「お土産、はい」

差し出された焼酎瓶を受け取るととても軽かった。そのまま、彩流は顔を寄せてきて耳元で囁いた。

「襲撃者の情報だよ」

「お前……」

撃退した襲撃者の残骸はすぐに回収されＩＳ学園の解析機関へと運ばれたようで、現在解析中との事でまだ教師達には公開されていない。

俺の読みでは多分だがずっと解析中にして情報を開示しないだろう。あの襲撃者には謎が多すぎる。生徒には実験機が乱入したなどと伝えられるはずだ。

「まぁ、寝酒にでもしてよ」

どういう意図があってデータを持ってきたかはわからないが、ここは素直に頂くとしよう。

「あぁ、美味しく飲まさせてもらうさ」

「本当に色々とビックリする味だよ、逆に寝れないかも。じゃ、おやすみ烈震」

とても意味深なセリフを言って彩流は帰った。そして部屋の中へと戻り、瓶を叩き割ってメモ紙を取り出し内容を流し読んで、俺は固まった。

彩流の野郎、寝かすつもりなんてさらさらないだろ。

「嘘、だろ……」

メモ紙には目を疑いたくなる内容が書かれていた。それは襲撃者のＩＳは無人機であると。

世界中で開発が進むＩＳだが、まだ完成されていない技術もある。それが遠隔操作（リモート・コントロール）と独立稼動（スタンド・アローン）。そのどちらか、あるいは両方の技術が襲撃ＩＳに使われていたらしい。

「……」

さらに読み進むと襲撃ＩＳのスペックが書かれていた。しかしその数値は殆どが推定値のようで、正確な数値は不明。襲撃ＩＳを撃退したのは織斑一夏だったようで、織斑の攻撃で機能中枢が完全に破壊されてしまったみたいだ。

「……」

メモ紙を一通り目を通したあと、携帯を手に取りある奴に電話をかける。出る可能性は低いのだが、なぜか今日に限っては出るだろうと思えた。

「……」

トゥルルルル……とコール音が続く。

そして、いつもは１０コール以上しても出ないのに珍しく１０コール以内に出てきた。

『もすもす、終日（ひねもす）～？　みんなのアイドル束さんだ』

ピッ―ツーツーツー……

「……はっ、思わず切ってしまった。珍しくかかったってのに何してんだ俺は?!」

俺が電話をかけた相手は、いつも俺を振り回す篠ノ之束である。

メモ紙の内容に驚きはしたが、そのあと俺の頭の中に真っ先に浮かんだのが束の顔だった。

世界はまだ第三世代の開発に着手し始めたところ。だから遠隔操作や独立稼動の研究はしていても実用化に至れる段階にいるはずがない。

しかし、ただ一人だけ例外がいる。それがＩＳ開発者の篠ノ之束だ。

すでにあいつは第四世代型に近いＩＳを開発している。さらに今回の襲撃ＩＳのコアは未登録のコアだったようだ。この世でＩＳコアを作れるのは篠ノ之束だけ。

結果、今回の襲撃ＩＳを送った犯人は束であると俺は判断した。

そして、襲撃ＩＳを送ってきた理由もなんとなくわかった。それを問い質そうと思って電話をかけたのだが、あんなおちゃらけた出方をされるとは思ってもいなかった。

「よし、気を取り直して……っと？」

再度、束に電話をかけようとした時、部屋のドアがノックされた。時刻は8時を回っている。俺の部屋に来る人間は限られているというか、彩流しか居ない。そして彩流（あいつ）はさっき来て帰った訳で、今ノックしているのは彩流ではない。

「電話はまた後でもいいか。今開けますよ」

携帯をデスクの上に置き、ドアへと向かう。外にいる人間は短気なのか、ノックの間隔が短くなり、叩く力も増している。このまま放置したらドアを壊されるかもしれない。

「はいはい、どちら様で……」

ドアを壊されたら困ると、すぐにドアを開けると予想外な人物が

「出るのが遅い」

織斑千冬がジャージ姿でそこに居た。

「……なんの用だ？」

「お前に聞きたいことがある」

上目使いの甘い瞳ではなく、鋭い眼光で睨まれて断れる人間がいると思いますか？残念ながら俺の知り合いにはいないね。もちろん俺も例外じゃないって事で、千冬を部屋に入れてる事にした。このまま立ち話をしていたら誰に目撃されるかわかったもんじゃない。

部屋に入った千冬は適当な場所に座り、俺は少し離れた場所に腰を下ろした。

「で、聞きたいことって？」
「今日の襲撃、お前はどう見る？」
歪みのないドストレートな質問だった。どう見るとの質問だが俺には襲撃の意図を理解しているつもりだ。ただ、それを馬鹿正直に千冬に答えるつもりはない。
「大馬鹿野郎の所業」
ある意味間違っていない解答だと思うんだ。答えの意図が千冬に伝わったのか、呆れ顔である。やっぱり千冬も気付いているみたいだ、襲撃ＩＳを送り込んだ犯人が誰なのかが。
「っと、噂をすれば影だな」
タイミングがよくデスクに置いてある携帯が震えだした。ディスプレイを見ると非通知だ。本来なら非通知だと誰だかわからないのだが、俺には誰が電話してきているかわかっていた。毎度毎度あいつは非通知でかけてくるんだ。
「……千冬、パス」
「なに？」
さっき自分からかけておきながら、今この電話に出る気になれなかった。だから通話ボタンを押して千冬に手渡した。
束との会話はそれはもう色々と疲れる。一人の時ならなんの問題はないんだが、他に誰かがいると完全に放置状態にしてしまう。千冬を完全放置することはできないし、束を無視すると後が怖い。それなら束の電話を千冬に出てもらえば俺は楽になるんじゃないだろ

うかという結論となった。

「……そうは聞こえないぞ」

ギロリと俺を睨みながら電話を続ける千冬。束も驚いた事だろう、俺にかけたつもりが出たのが千冬なのだから。

今更だが、なんとなく最悪の選択をした気もしないでもない。千冬に渡したのは5年間壊れ知らずの俺の携帯。いつぞやの嘘がばれる可能性が高くなった。

「……ちょっくら機嫌取りでもしますか」

よっこいせ、と立ち上がり部屋に備え付けられているキッチンへと向かい小型冷蔵庫を開き中を確認した。俺は小腹が空いたときなどに料理をすることがある。食材も適度に置いてあり、今ある食材を見て何を作るか考え始めた。

「ピーマンに玉ねぎ、豚肉か……」

電話が長いとも限らないし、手っ取り早く作れるものでいいだろう。と言っても、今考えた料理は２０分ぐらいかかるがな。

「まぁいいか。さっさと作るとしよう」

包丁と食材を手に取り料理を開始した。

突然、シンから携帯を手渡され耳に当てるようにジェスチャーされたので携帯を耳に当てると、とても聞きなれた声が聞こえてきた。

「酷いよ～れっくん。放置プレイなんて束さんは望んでないよ～」

「……」

この声を聞くだけで頭が痛くなる。

「ん～、おーいれっくん～、聞いてるの～？束さんはお怒りなんだぞ」

「そうは聞こえないぞ」

このまま黙っていてずっと束の声を聞いているつもりはない。本当なら今すぐ電話をきってシンに色々と問い詰めたいのだが、それと同じぐらいに束には聞きたいことがあった。元々、後で束には電話をかける予定だったのだ、それが少し早くなっただけの事。

「ありゃりゃ？この声はちーちゃんだね。あれ？なんでちーちゃんがれっくんの携帯にでるの～？？」

電話から聞こえる束の声から驚きの中に少しだけ怒気が含まれているように感じた。もし面と向かっていたら顔は笑っているが目は笑っていないだろう。

束は私と同じで何年経ってもシンへの感情は変わってないようだ。

放置プレイなんて束さんは望んでないよ（後書き）

更新遅れてすみませんでした。
ここから加速したいなぁ

烈震の呼び方
千冬→シン
束→れっくん

次回、篠ノ之束ＶＳ織斑千冬
間違ってないよ？

反則だよ、抜け駆けだよ、条例違反だよ！！

タンタンタンと軽快な音を立てて食材を切り刻んでいく。フライパンに油をひき、炒める準備ＯＫ。そして食材をフライパンに投下する手前で、少し手を止めて後ろを覗き見た。

俺の携帯を手にした千冬はもと居た場所にはおらず、立って窓際にいた。まだ、最初に居た場所なら少しぐらい会話を聞き取る事はできたかもしれないが、窓際はさすがに無理だ。

会話の内容はおおよそ想像はつくが、束が千冬に余計な事を言わないか心配になる。特に俺がここ数年間何をしていたのか、あいつは自分の首を絞めるのをわかっていながら口を滑らせかねない。

「……デザートも作っておくか」

緊急事態に備えるのは悪いことではない。

千冬がこれだけで許してくれるのかはかなり謎なんだけどな。

と言うか俺、ばれるの前提だぞ。

『あれはね、ただのメッセージなんだよ』

電話の先の束は何かの作業しているのか、少し周りがうるさい。

それでも聞き取れない程ではない。そもそもこいつの声がうるさい部類なのだ、相当な騒音でなければ聞こえなくなる事はないだろう。

回りくどい事は無しで、今日の襲撃はお前の仕業かと問いた。
第二アリーナを襲撃してきた正体不明のＩＳは無人機だった。この世で無人機のＩＳを作れるのは思いつく限り一人しか居ない。それが電話の相手、篠ノ之束。
しかし、送った犯人はわかっていても送った意図がわからなかった。束は意味のない事をする人間ではない。あれがただのデモンストレーションな訳が無いとは思っていた。

思っていたのだが、束の答えは予想外の言葉だった。

「メッセージ？」
『そ、れっくん宛てのメッセージ。ちゃんとれっくんに伝わったみたいだし、目標達成なのだよちーちゃん』
「なに？」

束の言葉に疑問を感じた。なぜ、伝わったとわかる？
束とシンが直に会った訳でもない、電話で話した訳でもない、何を思って伝わったとわかったのか。

『れっくんから電話があったのは、その確認だったんじゃないかなぁ？』

シンから電話？
この束からの電話の前に、シンは自ら束に電話をかけたと言うことか。そうか、あいつは束には電話をかけるのか。

『ふふふ、羨ましいでしょ』
「……何がだ？」

自然と手に持つ携帯に力が入る。ミシリと軋んでいるが知った事

ではない、これはあいつの携帯なのだから壊れても問題は無い。

『ちーちゃん、れっくんの携帯を壊さないでね。連絡とれなくなっちゃうから』

「……そうか、それは良いことを聞いたな」

さらに力が増す。

『わー、待って待って！』

瞬間的に危険を察知したのか、珍しく束から焦った声が聞こえてきた。本気で壊すと感じたんだろう、失礼な奴だ。

「……話を戻すぞ。あれがメッセジなら、お前はシンに何を伝えた」

無人機による襲撃なんていう迷惑な方法を使ったんだ、これで束が何かを企んでいないはずがない。こいつは平気で世界を困らすことをする奴なのだから。

『う～ん、何って言われると困るな。そうだなぁ～、ただの応援かな』

「応援？」

『うん、応援がしっくりくるかな。れっくん、がんばれ～って感じ？』

何を応援しているかわからないが、ここで一つだけわかった。

束はシンが今、何をしているかを知っているから『応援』ができるのだと。そしてそれはシンが私の前から消えた後でも束と連絡を取っていたという事。

胸の奥がチクリと痛む。

「束、お前はあいつが消えた理由を知っているのか？」

『……知らないよぉ』

束の口調はいつもと変わらないように聞こえるが、微妙に違う。どこかクスリと笑いが含まれた声だった。これは間違いなく知っている。

シンが消えた時、束に同じ質問をした。その時は束にしたら珍しく悲しい表情を浮かべ、泣いていた記憶があるが、どうやらあれは演技だった可能性がある。

シンが私の前から消えた事に、束が間違いなく関わっていると確信した。

「束、いつか口を割ってもらうぞ」

『口は割れないんだよちーちゃん。あれ？割れてるのかな？』

どうでもいい事を。だが、このまま同じ事を言っても話はループするだけ。聞きたい事は全てではないが聞くには聞けた。あとはシンに聞くとするか。

『ところでちーちゃん、料理でもしてるの？』

学生の頃から束との会話は唐突に話題が変わることが多々とある。それは今も健在のようだ。

こいつは私が簡単なモノしか作れないのを知っているはず。家の料理は一夏が作っているし、それ以外は基本外食だ。

「してないぞ」

『そうだよね、ちーちゃん料理しないもんね。でもなにか炒める音

が……』

そこで束の声が途切れる。
多分、音の正体に気付いたのだろう。

『もしかしてれっくんが料理してる？』

チラリと後ろを見ると、簡易キッチンで動くシンの姿があった。
この時間ではもう食堂は開いていない。だから自分の夕食を作っているのだろう。

「あぁ、その通りだ」
『ダメだよちーちゃん』

間髪入れずに束からの警告。そこには悔しそうな感情が混じっている。束の悔しそうな顔が目に浮かび私は少しだけ優越感を感じれた。

「なにがだ？」
『ちーちゃん、わかってるでしょ。れっくんの料理を食べるのは反則だよ、抜け駆けだよ、条例違反だよ！！」』

シンの料理は束の大好物だ。束がシンに心を開いたのも料理のおかげだったのだから。

「安心しろ。私はもう夕食を食べている」

ただ、少量だがなと心の中で呟く。私もシンの作る料理は好きだ。
それが今作られてるとなれば、束には悪いが食べたくなる。

『う〜、なんか信じられないよ〜』

本当に束はシンの事になるとしつこくなる。人の事は言えないか。

とにかくこれ以上話を続けても埒があかないだろう。残りの疑問はシンに聞くと決めた。大丈夫だ、ここは奴(シン)の部屋。私が帰らなければあいつは逃げることができないのだから。

『ちーちゃん、聞いてるの!?』

「悪いな束。どうやら携帯のバッテリーが切れそうだ」

『ふぇ!?』

「また後でかけ直す」

『ちょっ、ちーちゃん。バレバレな嘘はー』

ブッ……ツーツーツー

私の指は通話終了ボタンにかかっている。束が最後に言ったようにバッテリーの残量は十分に残っていた。そのまま携帯の電源を切る。

「電話は終わったか?」

振り返ると、なぜか呆れ顔のシンが立っていた。そして両手にはフライパンと菜箸が握られ、テーブルに皿が並べられている。

「千冬、飯は食ったか?」

そう聞きながらシンはフライパンに入っているピーマンと肉の炒め物、青椒肉絲を皿に盛り付けていく。その脇にはご飯と味噌汁が並べられていた……二人分のが。

「聞く前に食べさせようとしてないか？」

意地悪な質問だ。嬉しいくせに素直になれない自分が嫌になる。

「昔の癖で二人分作っちまったんだよ。まぁ、もう食ったって言うなら食えない量じゃないし一人で食うけどよ」

「いや、折角だから頂くさ」

ここで食べない選択は無い。

食べなければ束に自慢ができなくなるのだから。

「そっか。なら、熱々の内に食べようぜ」

「あぁ……いただきます」

千冬への機嫌取り料理は効果があったようで、千冬の表情は柔らかく見える。こういう顔が時折見えるとこいつはまだ２０前半だったなと思い出す。

普段の表情だと俺とタメなんじゃ？とか思ってしまう。殺されるから言わないけど。

「ごちそうさん」

やはり男と女では食のスピードは違うようで、俺はもう食べ終えたが千冬の前にある皿にはまだ量が残っていた。

「早いな」

「ゆっくりでいいぞ。俺はお茶でまったりしてるから」

食後を熱い緑茶でまったりするのが好きだ。さらに自分の作った料理を美味しそうに食べる人の表情を見ながらまったりするのが大好きだ。だから自分が料理を作った時は自ずと食事のスピードが上がってしまう。

さて、これからどうするか。

当然この後、千冬から何かしら質問をされるだろう。一応、料理をしている時に一通り考えられるだけの質問に対しての答えを用意したが、今更ながら気付いた事がある。

ここは俺の部屋だ。千冬の事だから答えるまで帰らないという考えの可能性が高い。

だから俺は最終手段を用意した。だが、できるだけ使いたくは無い。使うとあとが怖いからだ。これ以上、千冬の怒りは買いたくないのだが帰らなければ使うしかない。

今日と言う日はまだ終わりそうにないようだ。

反則だよ、抜け駆けだよ、条例違反だよ！！（後書き）

加速装置が作動せず通常の不定期更新でした。

これは束ＶＳ千冬だったのか？（ぇ

次回　織斑千冬ＶＳ白波烈震

多分、違うと思う（マテ

まったくもって悪趣味なメッセージだったな

「……言え。お前は、いや、お前と束は何を企んでいる」

千冬が食事を食べ終えると同時に、彼女の口から予想通りの質問が俺へと向けられた。俺は特段慌てることなく、お茶を一口飲んで千冬を見る。

彼女の目は俺の表情、呼吸、動作、全てを逃さないかのように鋭い。子供だったら間違いなく泣くぞ。

「束から何を聞いたかは知らないが、俺は何も企んでねぇよ」

「嘘をつくな」

「即否定かよ。なんで嘘だって言いきれんだ？」

俺はなにも間違った事は言っていない。自分自身は何も企んでいないのだから。

ただ、束から依頼されているＩＳの開発は束（あいつ）の企みの一つだから、千冬の言っている事はあながち間違いではない。

ＩＳ開発のちゃんとした理由を聞いた時、なんで俺なんだと本気で思った。俺より優れた技術者など世の中には沢山いるというのに。

「あの襲撃はお前へのメッセージだと束は言っていたぞ」

思った通り、束の奴は余計な爆弾を投下していた。一応、ダメもとではぐらかしてみよう。

「……メッセージね。お前を殺してやるとか？」

ＩＳや無人機で言い表せれるとしたら殺すや倒すと言ったキーワードだろう。ただ、束の言いたい事はそういう意味でないのは理解している。

「あいつは応援だと言っていたが」
「応援？　挑発の間違いだろ……って」

しくったと思っても時すでに遅し。

「それはどういう意味だ？」

そこには獲物を逃がさないかのように佇む鬼がいた。
強制終了プログラム起動を要請……許可するさっさと実行せよ。と脳がフル回転し出した。

「あー……そう言えばデザートを作っていたんだ。持ってくる」
「後でいい。シン、質問に答えろ。挑発とはどういう事だ」

引くな、強行突破しろ。

「そう言うなって、食べながら話そうぜ」
「……食べれば話すのか？」

疑いの眼差し。
勘が鋭いと言うよりも、俺の昔からの行動を知っているから疑っているのだろう。俺はこういった隠し事をしている時は何があっても口に出すことは無い。適当にはぐらかしたり、黙秘などでその場を終わらす常習者だ。
今思えば千冬はそれがわかっていたから俺の部屋へと来たのだろう。この部屋に居続ければ強制的に話を終わらすのが難しくなるの

だから。

「わかった、話してやるよ。とにかく折角作ったんだ、食べないともったいないだろ」

それでも強制的にこの話は終わらせる。

絶対に千冬に恨まれるだろうな。

「……」

「ほら、イチゴに罪はないんだから食えって」

持って来たデザートはイチゴのムース。

イチゴには罪はない、しかしそれ自体が罪だらけな一品。

「……睡眠薬とかが入っているんじゃないのか？」

「お前、どれだけ俺を疑うんだよ。パクッ……食わないなら俺が食うぞ」

程よい甘さが口に広がる。今回は洋菓子を作ったが、どちらかというと和菓子の方が好きだったりする。ならなんで洋菓子を作ったかというと、千冬が洋菓子の方が好きだからだ。

食べたら絶対に旨いと言わせる自信はある。まぁ、効果が出るまで少し間があるし少しだけ余韻には浸かれるだろう。

「ハァ……料理の腕が無駄に上がっているな」

「そりゃどーも。ほら、食えって」

「わかった、食べればいいのだろ」

そして千冬はスプーンでムースを掬い上げ口へと運んだ。

「（悪いな千冬）」

心の中で千冬に向かって頭を下げる。

この行動はあと何回するんだろうか、あと何人にするんだろうか。

今考えても答えがでるわけはないか。

「……思ったよりも甘くないな」

ムースを咀嚼し喉に通した後に感想がポツリと呟かれた。

「お前の好みに合わせたからな」

「そう、なのか？」

何をそんなに驚いたのか、目を見開いたと思えばそっぽを向いてなにかブツブツと呟いている。千冬らしからぬ行動に俺は少しだけ驚いてしまった。

そしてその姿が可愛く見えてしまったのは内緒だ。

「っと、そんな事よりもシン、言われた通り食べたぞ。さぁ話せ」

「せっかちな野郎だな。慌てたって良いことはないぞ。それに言っただろ食べながらだって」

俺もパクッとムースを口へ入れた。

「まぁ、話を伸ばしてもなんもメリットはないな。さて、何から話したもんか」

「なら、まずは束からのメッセー……む？」

千冬の頭がクラッとふらつく。効果が現れてきたようだ。

彼女の読み通り、イチゴのムースにはある無味無臭の薬が混ぜら

れていた。使ったのはとある軍で使われている超即効作用の睡眠薬と言う名の意識遮断薬。なんと摂取から5分以内に意識を断つことが出来る代物だ。

「どうした?」

「いや、なんだ? 急に……視界が……まさかシン、お前……」

はい、何かを盛ったとばれた。

でもはぐらかす。

「人聞きの悪い奴だ。疲れが溜まってんじゃないのか?」

「馬鹿を……言うな。これぐらいで……クソっ……シン、覚えて」

テーブルに手を付き身体が崩れ落ちないようにしているがそれも無駄な抵抗。それでも千冬の目は俺を睨んでいた。

「悪いな千冬。俺はもの覚えが悪い野郎だよ」

「くっ……」

ガクンと千冬の身体から力が抜けテーブルに突っ伏した。

意識が断たれた千冬の呼吸とか身体に異常が無いかを確認する。

特に異常なし、呼吸も正常とわかって、そこで初めて身体の力を思いっきり抜いて床に寝そべった。

「あー、無駄に疲れた」

身体が疲れたと言うよりも精神的にとても疲れた。寝そべったまま、息を数回吸って吐いたりした後に勢い良く身体を起こす。

できればそのまま寝てしまいたかったが、千冬をこのままここに残すわけにはいかない。

俺は携帯を取り出し、この状況で頼れる奴に電話をかけた。

『……はいはい、どーしました～？』

今度は本当に酔っ払いと化しているようだ。

電話の相手は穂村彩流。どうせ、未だに酒でも飲んでてまだ起きているだろうとは思っていた。

「悪い、ちょっと俺の部屋に来てくれないか？」

『ん～？　瓶の中身についてはノーコメントだよ？』

「あぁ、それとは別件だ。とにかく来てくれると助かる」

『そう。わかった、今行くよ』

電話を切ってからすぐに彩流が部屋へと来てくれた。そして、テーブルに突っ伏している千冬を見て唖然としている。

「……どういうこと？」

「まぁ、後日説明する。とにかく彼女を部屋に連れてってくれないか？」

「私に背負って行けと？」

「頼む」

彩流ならば女性ぐらいならば問題なく背負っていけるだけの力はある。ＩＳのパーツをＩＳの補助無しに持っているぐらいだ。女性だけでなく男性も問題はないかもしれない。男にしたら屈辱的過ぎてやられたくないシチュエーションだろうな。

「はぁ、わかったわよ。貸しだからね」

「サンキューな」

「よっと、あら、思ったより軽いな～。この軽さでこのスタイル、

なんか妬けちゃうな」

お前も十分なスタイルの持ち主だと思うぞ。というか、ＩＳ（ここ）学園は教員勢のレベルが高い。能力という意味もそうだが容姿という意味でだ。全員モデルをやってもおかしくない。

「それじゃ行くね」
「あぁ、よろしくな」

そう言って彩流は千冬を背負って部屋を出て行った。それを見送り、ドアを閉じて鍵をかけベッドへとダイブする。

「疲れた。もう寝る」

と、意識を落とそうとした時、携帯がブルブルと震えだした。心の底から無視したかった。でも無視できない。身体を起こして携帯のもとへと向かう。

「はいはい、どちらの変態技術者でしょうかね？」
『やだなー、それを言ったられっくんの方が変態だよ～』

電話の相手は言わずもなが、篠ノ之束。

「俺のどこが変態だよ」
『変態だよ～。束さんを放置したじゃんか～』
「……で、何のようだ？」
『スルー！？　酷いよ～れっくん』

束の会話で大事な事は、一つ一つまじめに受けないことだ。特にこういった雑談は下手すると止まらない事がある。

『まぁ、いいや。えへへ、れっくんメッセージは受け取ってくれたみたいだね』
「まったくもって悪趣味なメッセージだったな」
篠ノ之束がＩＳ学園を襲撃させた無人ＩＳ。それは俺への挑発。早くＩＳを完成させて対抗してみせろというメッセージ。
『ん～、だってれっくんが遅いのがいけないんだよ。あれから何年経ってるのかな～？』
「二年とちょっとだな」
『なら、完成してるよね？』
こいつはどこまで知っているのか。どこまで視えているのか。束の言った事に間違いはない。機体は完成している。ただ機体だけで中身や、武装が一切形になっていない。さらに一番大事な項目が決まっていない。
「６０％と言ったところだな」
『う～、早く完成させよ～よ～。束さんは先に行っちゃうよ』
「だったらちょっとは休めよ」
四六時中ＩＳを弄ってるからペースが異常なんだ。
こいつの場合、寝てる時も夢でＩＳの事しか考えてないんじゃないだろうか。
『え～、休んでも楽しくないじゃん』
「たく、とにかく俺の＜不知火（しらぬい）＞はまだ完成してない。気長に待ってろ」
『それだ……ま……なぁ』

「あ？」

何か小声で言われたが聞き取れなかった。

『そっかぁ、それじゃ束さんなりに待つ事にするよ～』

「待て、お前なりってのはどういう事だ？」

とても嫌な予感しかしない。

『それじゃ～ね～、れっくん。お休み～』

「ちょっ、おいこら」

――ガチャッ……ツーツーツー

携帯から電話終了の音が鳴っている。携帯をそっとテーブルに置き、再びベッドにうつ伏せに倒れ込んだ。

「あー、くそっ、余計に疲れた」

ごろんと転がり天井を仰ぐ。

「あいつ、絶対に何かを仕掛けてくるぞ。さっさと候補を決めないとな」

現状、ＩＳの開発に特に問題はない。問題があるのは操縦者。

俺の開発中のＩＳ＜不知火＞はかなり変わったコンセプトの機体である為、操縦者に相当な技量が必要になる事がわかっている。

「計画を早めるか。……千冬を撒きながらか、骨が折れるな」

明日、俺が五体満足で居られたなら、神様を信じようと思う。
そう思いながら眠りについた。

まったくもって悪趣味なメッセージだったな（後書き）

お待たせしました。

これでようやく原作に戻れます。

次回、やっとあの二人が登場！

俺は面倒事が大嫌いですからね

本日の目標、五体満足でいる事。
さっそく、目標を達成できそうにありません。

「……」
「あ、はははは」

乾いた笑いしか口から出てこない。理由はいたって簡単、目の前に織斑千冬がいるのだ。それはもう見事に阿修羅な形相である。
昨日の食事に一服盛りましたに怒り心頭だろうと思い、今日一日はエンカウントする事は極力避けようと思っていた矢先だ。なんと千冬の奴は職員室前で待って居やがった。
退路はない。というか、職員会議に出ないわけにはいかない、直進するしかないか。
やはり神なんていないんだな。

「あー、おはようございます織斑先生」
「えぇ、おはようございます白波先生」

頭を掻きながら目線を外しての挨拶。とてもじゃないが顔を見ることができない。見た瞬間、俺は確実に石化するだろう。

「えっと、そこを退いてくれませんかね、入れないんですけど」
「その前に、私と一緒に来てもらおうか」

あ、ダメだ今日で俺は死んだ。顔を見なくても私は怒ってますオーラ全開なのがわかる。おじいさんにおばあさん、今そっち側に行くぜ。

天へ召される覚悟をした時、後ろから思わぬ救世主が現れた。

「あれ、織斑先生に白波先生、おはようございます」

後ろを振り返えると見慣れたジャージ姿の女性、穂村彩流がニコニコと笑っていた。今ばかりはその笑顔が天使に見えるぜ。

「……おはようございます、穂村先生。今日は遅いですね？」

千冬の言うとおり彩流が俺よりも職員室に来るのが遅いのは珍しい。彩流は教員の中でもかなりの早起きで、どんなに酒を飲んでいても6時には起きて7時には職員室にいるらしい。そんな早起きの奴が寝坊とは珍しいとは思ったが、彼女と目が合うと、彩流はクスリと笑った。

こいつ、もしかして……

「えぇ、ちょっと眠るのが遅くて。それよりも中に入らないのですか、もう少しで会議が始まりますよ？」

わざとらしく腕時計に目を落としてそう告げる彩流。その言葉に間違いはなく、あと5分もすれば会議が始まる。千冬としてはここで俺を捕縛して会議そっちのけで尋問する気だったのだろうが、彩流の存在によってそれは出来なくなった。

なんでそう言い切れるかって？　あいつの目がマジだからだよ。

「……そうですね」

千冬は踵を返す直前に俺を一睨みしてから職員室へと入っていった。

「あーマジで助かった、彩流」
「こんな事だろうと思って遅めに来て正解だったね。烈震、貸し一よ」
思った通り彩流は俺が千冬に捕まっていると予想して、遅めに来たようだ。今日は優しい優しい天使様と拝む事にしよう。
「それにしても、本当に何をしたのよ？」
「後で話す。俺達も入ろうぜ」
「たく、ちゃんと話しなさいよー」
別に隠す事ではないのだけど、もう会議が始まる時間だったので急いで職員室へと入った。
「それでは今日一日、頑張ってください」
朝の職員会議は滞りなく終わったのだが、みんなどこかソワソワしている。それはそうだろう、俺だって耳を疑ったさ。疑ったから彩流に確認してみたら「悔しいけどあんたの耳は正常よ」と返ってきた。悔しいってどういう意味か聞きたいがそれどころではない。
学園長代理から朝一番で伝えられた内容、それは織斑一夏に続いて二人目の男のＩＳ操縦者が現れたというものだった。しかもＩＳ学園に転入する事が決定済みらしい。
「あぁ、白波先生、少しよろしいですか？」
ソワソワしながらも皆、仕事へ移って行く。そんな中、俺も整備

室へ向かおうと腰を上げたところで学園長代理に呼び止められた。

「なんですか？」

「こちらへ来ていただけますか？」

「？」

ガチャとドアを開ける代理。職員室の隣は学園長室のはず。

「なに？　また問題でも起こしたの？」

「人を常習犯みたいに言うな。何もしてねぇよ」

彩流がとても失礼な事を言ってくるので否定したが、実のところ何個か思い当たる節がある。しかし、バレる様なミスはしてないはずなんだがな。

「……」

ドアをくぐり、学園長室へ入るとそこには学生服が二人、そして千冬と学園長代理がいた。

「来ましたね。白波先生、先ほどもお伝えしました男性のＩＳ操縦者は彼です」

そう指し示したのは二人のうちの一人、男子制服を着た方。

「彼はシャルル・デュノアくん。デュノアくん、彼は男性専属の相談員の白波烈震先生です。わからない事がありましたら先生に相談してください」

「はい。初めまして、白波先生。シャルル・デュノアです」

「あ、あぁ、初めまして」

まさかもう学園に来ているとは思わず、少し呆けてしまった。
デュノアは人なつっこそうな顔で礼儀正しい立ち居振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪でそれを首の後ろで丁寧に束ねていて、身体は華奢というかスマートだ。
そして声だが、男にしては少し高い気がする。
見た目は男なのだが、何か引っかかる。そんな事を思いながら、俺の目はデュノアの隣に向けられていた。
デュノアとは対照的な銀髪。綺麗な髪は腰近くまでおろしているが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしの印象を受ける。しかし俺が目を向けた原因は髪色ではなく彼女の目。左目にある医療用のモノではない黒い眼帯。そして、開いている右目は赤色と珍しい色をしている。

「えっと、彼女は？……てか、女性ですよね？」

ＩＳ学園の制服はカスタマイズ自由な制服だ。とは言え、男子（織斑だけだが）はズボン、女子はスカートなのは変わっていないのだが、銀髪の娘はズボンと言うかどこかの軍隊物のズボンを穿いていた。

「彼女は女性ですよ。名前はラウラ・ボーデヴィッヒさん。ドイツから来られました」
「……」

赤色という珍しい瞳は俺を見た後にすぐ逸らされた。そして逸らした先にいるのは千冬だ。ボーデヴィッヒは千冬を捉えて離さない。

「……（千冬のファンって訳ではなさそうだな。ボーデヴィッヒ……ドイツ……眼帯……あー、嫌なこと思い出したぞ）」

少し前にドイツでとある軍隊に追われ、命からがら逃げ切った事を。せっかく忘れていたのに思い出してしまった。背中に嫌な汗が流れる。

「……（つか、あいつらと同部隊の奴だったら俺、ヤバくないか？）」

「どうかされましたか？」

「いえ、なんでもないですよ。それで俺が呼ばれたのは顔合わせって事で？」

「えぇ、それもあるのですけど、その前に織斑先生。二人をよろしくお願いします」

「はい、行くぞデュノア、ボーデヴィッヒ」

「「はい」」

千冬は俺を一瞥してから二人を連れて出て行った。そして学園長室に残ったのは俺と代理だけ。こっちが本題か。

「それで、本題はなんでしょうかね？」

「……白波先生は二人目の男性が現れた事を知っていましたか？」

「知りませんよ。今日聞いてビックリしてます」

独自の情報網というか、束から聞いてもいない情報が寄越される事が多々とあるのだが、今回それはなかった。という事は束が感知していないと事になるのか、有り得ないな。

「……彼は本当に男性ですか？」

束が二人目の男性が現れた事を知っていれば真っ先に知らせてくるはずだ。織斑の時がそうだったのだから。

だから率直に聞いたのだが、学園長代理の答えは予想していなかった。

「わからないわ」

「わからない？　なんでですか、編入するなら身体検査ぐらいしているでしょ」

男か女かなんて、身体を調べれば一目瞭然だ。この世はＩＳによって機械技術は発達しているが生体分野においてはまだまだで両性体なんて存在はいない。

「検査はしてないわ」

「どういうことですか？」

ますますもって怪しくなってきた。

「シャルル・デュノアの情報は日本政府から直接伝えられてきたわ。それも昨日ね」

「また唐突な」

「その時、同時にこう伝えられたわ『シャルル・デュノアの身体検査は既に終わっている為、必要なし。詳細は書類を添付する』と。これがその書類よ」

差し出された書類を受け取り目を通す。それにはシャルル・デュノアの身体詳細が書かれていた。ご丁寧に裸の写真まで添えられている。

しかしこれは、はじめて見るな。

「普通、ここまでします？」

「しないわね。これを作った人は馬鹿なのよ」

「これまたストレート事で。間違ってないですけどね」

男であると言うことを疑われないために、裸のしかも陰部まではっきりと写されている写真を添えたのだろうが、これは疑ってくださいと言っているようなものだ。

それにこの写真、作りが雑だ。雑というのは言い過ぎかもしれない。普通の人なら疑問に思わないだろうが、俺の様な技術者の目から見たら首から下の色がおかしい事に気付くはずだ。よってこの写真は偽りである事がわかる。

学園長代理が何で気付いたかはわからないが、どこかしらかで偽物だと気付いたに違いない。

「なら、シャルル・デュノアは女であると？」

「それをあなたに調べて欲しいのよ」

「あぁ、本題はそれですか。シャルル・デュノアが女であるか、そして狙いはなんなのかってとこですか？」

もし本当に女なら、なぜ男のフリをする理由はなんなのかという事だ。ただ、そこから考えられる狙いはなんとなくわかる気がする。それが確実なら、なんて大胆な事をするんだと感心してしまう。

「話が早くて助かるわ。なるべく穏便にお願いね」

「面倒な事にはなりませんよ。俺は面倒事が大嫌いですからね」

こうして面倒な仕事が増えてしまった。ただでさえ、計画を早めようとしていたところなのに、計画の方は止めざる得ないか。

さっさと調べて、さっさと再開しますかね。

俺は面倒事が大嫌いですからね（後書き）

原作は好きなんですけど、疑問が多々とあるので独自解釈で進んでます。
相変わらず原作キャラと絡みが少ないなー（棒

誤字脱字、意見感想などありましたら遠慮なくお願いします。

大丈夫ですよ、生徒会長ですから

学園長代理からシャルル・デュノアの調査を命じられた後、俺はデュノアがいる一年一組に行くのではなく自分の仕事場であるＩＳ整備場へと向かった。

無論、教員としての仕事をする為だ。

いくら代理から仕事を命じられたからといって本職――本来なら技術者が本職で教員が副職なのだが、今は教員が本職である――を疎かにするわけにはいかないし、自分から命を縮めに行くわけがない。一年一組にはデュノアだけではなく織斑千冬もいるのだ。

「彩流にも説明しないといけないし。今日はトコトン疲れる日になりそうだな」

ボヤいても仕方の無い事はわかっているのだが、ボヤかずにはいられない。こうして次々と問題が起こると本気で呪われているのではないのかと疑いたくなる。誰にとは言うまでもないだろう。

そんな事を考えながら廊下の角を曲がった時だ、違和感を感じた。

「（見られている？　いや、俺じゃない）」

廊下には生徒がポツリポツリと居る。その光景は当たり前だ。まだ一時間目が始まるには少し時間がある。だから生徒が廊下にいる事自体に違和感はない。

違和感があるのは視線。軍に追われたなどと言う恐怖体験をしている為、視線や気配に少しだけ敏感になっている。常日頃から千冬に睨まれ続けているからという事もいえるだろう。

そのおかげか、この廊下に存在する視線に違和感を感じた。人が

いるのだから視線があるのは当然。しかしその視線はこの廊下からではなく廊下に繋がる教室から感じられる。
誰かが廊下を窺い見ているのだ。
なぜ？

「（と、考えても俺には関係ないか。どうせ誰かを驚かそうと考えてんだろうな）」

学生らしいなと無理矢理考えた後、廊下を進む事にした。
そして、視線が隠れる教室を通り過ぎた時、視線が強まった。それはただの視線に意思が、敵意が含まれたモノに変わった。思わず振り向きはしないものの足を止めてしまう。

「（なんだ？標的は俺か？）」

しかしそれは勘違いだとすぐにわかった。視線は俺の１０Ｍ程前にいる女子生徒に向けられていた。
前にいる生徒は誰かと一緒という事ではなく一人で、ゆっくりと俺の方へと歩いている。

「（なんだ？）」

教室に隠れている生徒は俺を見ていない。
しかし、俺の方へ向かって歩いている生徒は明確に俺を視界に収めている。収めると言うよりも捉えているが正しい。思わず後退りしたくなった。
どこか危険は香りがする。アレに関わってはダメだとなぜか頭が警告している。

「（つか、話しかけなきゃいいんだよ。素通りすりゃ問題ない）」

そう思ったのが間違いだった。それは俺が話しかけなければいいだけであって、相手から話しかけられたりする可能性を忘れていた。

案の定、

「おはようございます、白波先生」

ニコやかに朝の挨拶をされてしまった。ここで無視する訳にもいかない。生徒に挨拶されたのだから挨拶を返さないなど、教師としたらあるまじき事。

「あぁ、おはよう」

しかしながら、生徒の顔を見ても名前がわからなかった。

俺は赴任してまだ半年も経っていない。このＩＳ学園に在籍している生徒を半年で覚えられるほど記憶力は良くないし、未だに面識を持ったことがないのが多数だ。そして目の前にいるのは面識の無い生徒の一人。

全体的に余裕を感じさせる態度。しかし、嫌味ではなく、どこか人を落ち着けるような雰囲気がある。けれどそれとは逆に浮かべた笑みはイタズラっぽく何かをされると、俺の警戒心を高まらせていた。

この顔はどことなく悪友達に似ている気がする。

「私の顔になにか付いてますか？」

「いや、すまん。なんでもない」

凝視していた目を窓の外へと向けた。その仕草に生徒はクスリと笑われ、俺はガラにもなく指で頬を掻いた時だ、それは始まった。

「覚悟ぉぉぉぉっ！！」

教室で様子を窺っていた生徒は声を上げ廊下へと飛び出した。その手には竹刀が握られている。それを目にした俺は思わず、殆ど条件反射で迎撃行動の体勢に入って、懐に忍ばせている携帯武器に手を伸ばしてしまった。

しかし、それを出すことはなかった。

竹刀は目の前にいる生徒が持つ扇子によって遮られていた。

「迷いの無い踏み込み、いいわね」

そのまま竹刀を受け流し、左手の手刀を襲ってきた生徒の首に叩き込む。容赦の無い一撃に襲撃者である女子生徒は崩れ落ちた。

そして撃退した生徒は何事も無かったかのように警戒を強めた俺に顔を向けた。

「それに先生の反応速度も中々のモノですね」

「そりゃどうも」

すべては一瞬だった。襲撃者を相手にしている間に俺は迎撃体勢を解き、彼女達から距離を取っていた。今、話している生徒との距離は約５Ｍ程。

「先生、まさかと思いますが私の事を知りません？」

ずっと俺が警戒している事に疑問をもったのだろう。本当ならＩＳ学園の生徒であるのは間違いないのだから警戒する必要はないのだが、襲われながら慌てずに対処し、何事も無かったようにしている。それは日常的に襲われていると言うことだろう。そんな非常識な相手を前にして警戒するなと言う方が難しい。

女子生徒からの質問に俺は素直に答えた。

「そのまさかだ。よければ自己紹介してもらえないか？」

「こうして顔を合わせるのは初めてですから知らないのも無理はないですよね。私は更織楯無（さらしきたてなし）。ここＩＳ学園の生徒会長をしています」

警戒していた理由が形を成した。

「（さらしきってあの更識じゃないだろうな？）」

“さらしき”と言う名はそれほどメジャーな名前ではない。しかし一般人が“さらしき”と聞いてもなにも疑う事はない。疑いや警戒を露にするのは一部の政府、軍関係者や訳有り者ぐらいだ。

そして、俺は訳有り者に不本意ながら分類される。

更識とは裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部の家系である。

「（……生徒会長、ね。なら、間違いなく更識だろうな。対暗部用暗部の更識が生徒会長とは、ＩＳ（ここ）学園の底は計り知れないな）お前が生徒会長というのはわかったが、なんで襲われてんだ？」

警戒レベルを維持したまま、襲われた理由を聞く。

生徒会長が生徒に襲われるのだ、普通の学校ならありえない事。

このＩＳ学園は普通の高校と違うとは言え、やはり異常事態であるのは間違いないのだが、更識は持っていた扇子を振って広げる。

そこには最強と文字が書かれていた。

「それはＩＳ学園において生徒会長という肩書きは、全ての生徒の長たる存在は最強であれ、と言うことです」

「……なるほど、だから挑まれるのか」

「先生は頭がいいんですね」

絶対に褒め言葉じゃない。

更識の顔は束の意地悪い顔にそっくりだ。

「じゃぁ、なにか？　お前に勝てば勝った奴が生徒会長になるって事か？」

「本当に頭がいいですね。あれだけの説明でそこまでわかるなんて」

「煽てても何も出ねぇよ」

更識の言った事を理解するのはそれ程難しいものではなかった。

それは今起こった事を目にしていたから、理解し易かっただけで、何も情報がなければ理解するのに時間がかなりかかっていたはずだ。

「それで、一限目がもうすぐ始まるんだが、行かなくていいのか？」

いつも付けている銀の腕時計に目をやるとあと数分で授業が始まる。俺は教員だから問題はないが更識は生徒会長とは言え生徒である。授業に遅れるのは生徒会長とはいえ拙いだろう。そう思っていたのだが

「大丈夫ですよ、生徒会長ですから」

「……」

言い切った。はっきりと職権乱用しますと断言しやがった。

しかし、呆気に取られたのも一瞬。

「実は先生にお願いがあるのですけど、聞いていただけますか？」

女難の相は織斑だけではなく俺にも現れていたようだ。
今日はまだ始まったばかりだと言うのに色々と事が起きすぎじゃなかろうか？

「どうかしましたか？」

「場所を変えましょう」と言い背中を向けて歩き出した更識を無視する事もできたが、こいつを無視すると悪友同様、色々と俺が拙い事になる予感がしたので渋々と従うしかなかった。
そして、更識の後を付いて辿り着いたのは生徒会室と書かれた教室、言わば更識の城だ。
更識の言葉はドアを開ける前だった。俺から発せられる不満のオーラを感じてか振り向いて俺の顔を窺っている。

「いや、なんでもない」
「そうですか」

何が楽しいのか、口元に笑みを浮かべながら教室のドアを開けた。
それに続いて中へと入る。
時刻は一限目が始まった頃。それなのに目の前の生徒はそんな事を気にする様子も無く、優雅に腕組をして座席にかける。

「どうぞ、先生もお掛けになってください」
「あぁ」

更識に促され、近くにあったパイプ椅子に腰をかけた。

「それで、お願いってのはなんだ？」
「……先生はシャルル・デュノアの調査を依頼されましたよね？」

本日、何度目の驚きになるのだろうか。
こちらの予想は何度も外され、相手からは驚くことを口にする。
今日一日、本当に気を引き締めないと、大怪我を受けかねないな。

「生徒会長にしちゃ情報が早いな」
「全ての生徒の長ですからね。生徒の情報はどこよりも早いんですよ」

どこよりも早いか。それはこの学園で一番早いと言っているんだろうな。一番は言い過ぎか。だが、学園長代理と同列なのは間違いない。
それが生徒会長だからなのか、更識だからなのか。絶対に後者だな。

「否定したって意味はないな。お察しの通り、学園長代理から依頼されてる。それで？」
「実は私にも調べるようにとお達しがきまして。先生、単刀直入に言いますけど、私に協力してくれませんか？」
「……」

すぐに言葉が出なかったのは、絶対に裏があると思ったからだ。
このシャルル・デュノアの調査は性質的に、学園以外も調べる可能性があった。
シャルル・デュノアの性別を調べるのには苦労しない。要はばれない様にノゾキをすればいいのだから。
問題はその裏に潜む影の調査。
束の力を借りればすぐに調べる事は出来るかもしれないがそれは

後々、面倒な事を起こしかねない。よって自力で調べなければならない。これはかなり面倒な事だ。
現状を考えれば更識の提案は嬉しい。更識は対暗部用暗部の家系だ、裏に潜む影の調査は楽なものだろう。
しかしここで疑問が浮かぶ。
なぜ更識に依頼していて、俺にまで調査を命じたのかだ。

「更識、協力と言ったが、何をどう協力するんだ？自分で言うのもなんだが、お前が本気で調査すれば俺なんか不要なはずだぞ」
「……先生は更識の事を知っているんですね」
「別に驚く事じゃないだろ。すでに俺の事も調べてるだろうしな。つか、こんな話をしている時点でお互いそれなりに相手を理解してなきゃできんだろ」
「ウフフ、その通りですね」

ちなみに俺が更識を知っている理由は、束から『この人には注意』と書かれたメモを渡されその中に更識の名前があったのだ。その中に千冬の名前があったのには凄い違和感を覚えたが。

「先生に協力していただきたいのは、シャルル・デュノアの監視です」
「監視？」
「はい、今回の調査は私が全てやります。ただ、それに手が取られてしまい、対象を監視する事ができません」
「……お前なら難なく両方こなせそうに見えるが？」

買い被りとかではなく、本当に出来そうに思える。
更識と会ったのは今日が初めてだが、こいつの雰囲気はこの歳では考えられないものを纏っている。

「いやですねぇ、私はただのか弱い女子高生ですよ」
「か弱かったら、さっきは負けてたはずだが？」
「あら、ばれた」

それにしても、こいつは楽しそうに笑うな。どうにもこいつは俺の事を教師として扱っていない気がする。

「話を戻すぞ」
「逸らしたのは先生ですけど？」
「はいはい、悪かったよ。それで、お前に協力するかどうかだったな。そういうことなら協力するさ」

骨の折れる面倒事をやってくれるのは本当にありがたいことだ。

「顔がにやけてますよ」
「……気のせいだ」

負担が軽くなって嬉しすぎて顔に出てしまった。更識からのジト目から逃れる為に顔を明後日のほうへ向ける。
この仕草はあいつに似てんなとどうでも良いことを思い出した。

大丈夫ですよ、生徒会長ですから（後書き）

一夏、シャル&ラウラは何処へ？
はい、楯無さん登場です。
ここでの会長登場を予想できた方はいるのだろうか？

誤字脱字、意見感想などありましたら遠慮なくお願いします。

なんて絶好のタイミングなんだろう

思わぬ協力者を得た後、ようやくＩＳ整備場へと着いた俺を待っていたのは本日三度目の女難になるだろう穂村彩流だった。
出迎える彩流の片手にはスパナ、逆の手にハンマーを持って清々しい笑顔だ。ちなみに入ってすぐに回れ右をして逃げようとしたが、ドアを遠隔操作したのか開かず逃げることが出来なかった。よって見事に追い詰められている。

「言い訳があるなら、お早めに」

言い訳確定かよと心の中でつっこむ。
さて、ここで生徒会長に捕まっていたなどと本当の事を言ったとしても、「なんで？」と聞き返されたら何も言えなくなる。
生徒会長である更識の家の役職を知っているのは教師の中でも極一部だろう。
それに学園長代理に依頼された仕事は内容的にも極秘扱いのはずだ。よって、ここで彩流に伝える言葉は真実と嘘を混ぜた――

「美少女にナンパされて」
「……」

俺の言葉は最後まで続かなかった。
言葉的には間違っていない。美少女にナンパされていた＝更識に連行されていた。ほら、何も間違ってないのに。

「で、あんた、織斑先生に何をしたのよ？」

頭にデカイたんこぶを生やした俺の横で画面から目を離さず、手を止めず彩流が問いかけてきた。

あの後、何をされたのかは頭のたんこぶでわかるとして、俺は３０分程気絶していたようだ。気がつくと作業スペースで寝そべっていた。

「ん～、何って。昔話をしてただけだぞ」

彩流の問いに俺も手を止めず答える。

今俺が行っているのは二年生からの打鉄（うちがね）使用願いがあったので、二年生用に調節を施している。ちなみに隣の彩流は教員が使うＩＳの調整だ。

「昔話？」

「そ、酒も交えてな。で、織斑先生は酔って眠ってしまいましたって事だよ」

「……」

そこで横から聞こえていたコンソールを叩く音がピタリと止んだ。

ん？と思って横を見るとジト目の彩流がこっちを見ていた。

「どうした？」

「……ハァ、まぁいいわ。そういう事にしといてあげる」

溜息一つついて彩流は顔を画面へと戻した。

俺の言葉が１００％嘘だとわかっていながら、俺が話せない事だ

と悟ってくれたから話を切ってくれた。
これでまた貸し一つだな。返済できるかね。

「よしっと、これで終了。彩流、そっちはどうだ？」
「まだちょっと掛かるかな。竜宮先生の調整ってちょっと細かいのよ」
「そっか、それじゃ俺はちょっくら出るわ」

調整したモノにブロックをかけ、席を立ってひと伸びする。歳かね、背骨からパキポキと音が鳴るよ。

「どこに行くのよ？」
「んー、野郎共に会ってくる」

本日の一年一組の時間割を調べた所、今の時間は第二アリーナでＩＳの実技実習が行われているようだ。そして俺は第二アリーナの観客席ではなくピットへと向かった。
理由は単純に千冬に会いたくないから。それにピットからなら色々と観察し易い。

「立ち上げ完了っと。さてさて、今日はなんの実習をやっているのかね？」

管制席に座り、メインモニターにアリーナの様子が映し出される。そこに三機のＩＳが空を舞っている映像が映し出された。

「あれは甲龍（シェンロン）とブルー・ティアーズって事は凰とオルコットか。それにもう一機はラファール・リヴァイヴだな、操縦者は……は？」

手元のコンソールを叩いて画面にステータスを映し出すと、そこにラファール・リヴァイヴの操縦者欄に山田真耶と表示されていた。

「おいおいマジか。マジであの山田先生か？」

山田真耶。

ＩＳ学園一年一組の副担任で、小柄なら眼鏡をかけた人だ。そして俺に対して目の前でドジをやらかし面倒事を振りまく女性だ。

それが今や二人の専用機持ちを相手に優位に立って戦っている。

「すげぇ、回避先を読んで攻撃しやがった」

モニターには射撃でオルコットの回避行動を制限し誘導した後、誘導先にいた凰にオルコットを衝突させグレネードで両方を一気に撃墜する山田先生が映されていた。

「ＩＳを使うと人が変わるのかね。あれ程の判断力がなぜ日常生活で活用されないのか、不思議すぎる」

山田先生のステータス画面に目をやると、代表候補生クラスの能力値が表記されていた。特に空間認識と戦闘判断の値は代表クラスと言っていいほどだ。

国家代表になれなかったのはそれ以上の存在が、織斑千冬がいたからだろう。

千冬（あいつ）はＩＳを装備していなくてもなぜか超人的な能力を有してい

る。そこに現代最強の装備ＩＳが加われば誰にも超えることのできない世界最強者の出来上がりだ。
千冬と同期の候補生は皆、候補生止まりだったはずだ。
山田先生もその内の一人だろう。

「それにしても今の戦闘は何の意味があったんだ？　そりゃＩＳの戦闘は見るだけで勉強になるだろうが、今のはあまり得られるものはなかったと思うぞ」

山田先生が見せた先読みの技術は素晴らしい。しかし、あれは熟練者から見れば先読みだとわかるが、まだＩＳ戦闘をただ目で追うことしか出来ない人には説明を受けなければ撃墜された側のミスのようにも見えてしまう。
そして、教師である千冬から今の戦闘に関しての説明がなされている様には見えない。
かわりに専用機持ちに何かしら指示を出している

「ただのデモンストレーションか？まぁいいや、それじゃ監視を始めようかね」

アリーナのカメラを操作し、焦点をシャルル・デュノアに合わせる。
それに合わせ持ってきた資料に目をやる。
シャルル・デュノアはすでに専用機を持っている。

ＩＳラファール・リヴァイヴ・カスタム？
先の戦闘で山田先生の使っていたＩＳラファール・リヴァイヴと同社モデルでデュノアのはリヴァイヴのカスタム機になる。
カスタム機なのだが、形状（フォルム）からして大分違う。一番違うのは肩部で、本来着いている四枚の物理シールドが全て取り外され、かわり

に左腕にシールドと一体化した腕部装甲が付けられている。

「ふむ、通常のリヴァイヴよりも機動性が高くなってるのか。見た目だとそれぐらいしかわかんねぇな。あとは中身か……例によって例の如くしっかりとロックしてやがんな」

ＩＳの情報は個人情報内に記載されている。そして国家代表候補生のデータは各国極秘扱いとなっている為、下手に手を出せない。

「……胸は装甲で隠してるか。中性的な顔立ちだから、決定的な違いがなきゃ判断つかないな」

俺の目はＩＳからデュノアの身体へと映っていた。

朝に会った時のデュノアの胸には膨らみはなかった。さすがに男だと言っているのだからその程度は隠していて当然か。

「それにしても、なんて絶好のタイミングなんだろう」

遅かれ早かれこの機会はやってくると確定していた。実習でＩＳを使うにはＩＳスーツに着替える必要がある。

ＩＳスーツは量子変換された状態でＩＳに登録されおり、ＩＳを起動させると自動的に服装がスーツへと入れ替わるがエネルギーを消費してしまうため、ＩＳスーツを先に着用してから展開するのが一般的となっている。

よってこの実習終了後、デュノアは制服に着替える為に更衣室に行くのだからその現場を目撃すればいいだけの話なのだ。

決して変態的な行動ではない。

「それまではじっくりと監視してるか」

モニターにはデュノアだけが映っている訳ではない。この映像は貴重だろう。なんと言っても、各国の専用機が五機も揃っているのだ。

男性初のＩＳ操縦者、織斑一夏。ＩＳ白式（びゃくしき）
イギリス代表候補生、セシリア・オルコット。ＩＳブルー・ティアーズ
中国代表候補生、凰鈴音。ＩＳ甲龍
フランス代表候補生、シュルル・デュノア。ＩＳラファール・リヴァイヴ・カスタム？
そして、ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒ。

メインモニターとは別に新しいサブモニターを起動させ、他の四人とは違う空気を纏ったボーデヴィッヒへとカメラを向けた。

「イギリスも中国も厄介だが、ドイツもとてつもなく厄介な機体を候補生に与えてんな」

ボーデヴィッヒのＩＳは昔見たことがあった、データ上でだが。

ＩＳシュヴァルツェア・レーゲン。

当時、ドイツが第三世代型を計画し始めた時の先頭にあった機体だ。あれからまだ数年しか経っていないと言うのにすでに稼動段階にまで持ってきたことに驚いた。

なぜ驚くのか。

それはこのＩＳには特殊な能力があるからだ。ただし、それがしっかりと起動するかは見なければわからない。それが完全に機能したら俺はドイツの技術者を賞賛すると思う。

「えらくスマートなのは武装を展開してないからかね？近いうちに見れればいいけどな」

どうせ織斑が一悶着起こしてくれるだろうと勝手に期待しておく。そうこうしている内に、あっと言う間に実習は終了し片付けが始まっていた。片付けが終わった生徒は次々とアリーナからいなくなり、そこにはデュノアと織斑だけしか残っていなかった。

メインモニターのカメラはデュノアから外していない。そのデュノアに織斑が近づき何かを話している。

「ん？織斑が先に更衣室に向かった？デュノアはまだ行かないのか」

織斑はデュノアに向かって手を振ってアリーナを出て行った。そしてアリーナにはデュノアだけがポツンと残っている。

と、急にキョロキョロと辺りを見回し誰もいないことを確信したのか、徐にデュノアが胸部装甲を少しだけ動かした。

「？！」

カメラの位置が絶妙で、たまたまズームしていたおかげでそれが見えた。

胸部装甲と体の間に見えたのは男性とは思えない胸の膨らみ。それは女性的身体特徴である乳房だった。

しかし映像記録としては残るが、少し証拠としては弱い。合成だと言われてしまう可能性がある。

「さて、思わぬ所で確認出来たが、結局は覗かないといけないんだよな」

もうアリーナには誰も居ない。デュノアはアリーナの更衣室へと

向かっている。
管制席から立ち上がり、癖になったのか体をグーっと伸ばす。そして俺は早足にピットから立ち去った。
次の目的地は当然デュノアが向かった先、更衣室だ。

なんて絶好のタイミングなんだろう（後書き）

次回　烈震、変態の道へ

烈震「待てや、ごらぁ！！」

誤字脱字、意見感想ありましたら遠慮なくお願いします

欲情するほど飢えてねぇ

「……」

ピットから急いでアリーナの更衣室の前まで来た俺は昔、軍などから逃げ続けた時に身に付けた隠密術を用いて気配を断って中へと入る。

あまり更衣室に来ることがないから久しぶりに中を見るが、さすが大勢が着替えられる更衣室。

この更衣室は放課後の自習や学園で行われる対抗戦などの時に使われるが、通常授業では織斑だけが使うことになっている。女子は教室で着替えているそうだ、普通は逆だと思うが。

「……ふぅ」

少し先から溜息が聞こえた。声だけでは男か女かは判断できないが、その声の持ち主は聞き間違いなくシュルル・デュノアのものだ。

「う～ん、やっぱりこれは苦しいな。でも我慢しな……きゃ」

デュノアの顔がみるみる真っ赤に染まっていくのがわかる。ついでにサラシを胸に巻いている途中で手は止まり、口は金魚のようにパクパクと開閉している。

それはそうだろう。なんせ男に化ける瞬間を目撃されているのだから。

俺が気配を断って中に入ったのは、決定的瞬間を隠される訳にはいかないからだ。アリーナで監視していた時はその現場をコッソリ覗けばいいと思っていたが、更衣室（ここ）に来るまでに少し考えが変わった。

覗いて正体を知った後どうするか。
普通ならこの仕事を命じてきた学園長代理に報告するのだろう。その後は俺の関する所でないのはわかる。この問題の大本は俺の手には負えない問題だ。
しかし、この問題は利用できるんじゃないかと思った。
俺は今、様々なＩＳの情報が欲しい。特に国家代表候補生のＩＳは喉から手が出るほどに。そしてシャルル・デュノアは丁度いい事にフランスの国家代表候補生。
しかもデュノアと言えば量産機ＩＳのシェアが世界第3位の大企業だ。ＩＳの情報に事欠かないはず。
だからこの件を使って情報を得ようと考えた。

「よう、何驚いてんだ？」
「……あ、あの……」

見事に動揺している。自分で言っておいてなんだが、これは誰でも驚くよな。
それにしても、とデュノアの身体に目を向ける。
下はすでに制服に着替えているが上は胸にサラシを少し巻いた今、洗濯板にしますよ状態なのだが、どれ程絞れば朝の様な状態になるのか疑問だ。
それだけデュノアの胸は大きい。

「あー、まぁ、まずは着替えろって。話はそれからだな。……一応言っておくが、逃げるなよ？」

呆然とするデュノアから離れ、逃げないと思いながら保険の為、ドアの前へと向かう。
この更衣室、広いだけでなく様々な設備を有していてなぜか自販機まで完備されている。そこで缶コーヒーを購入、それを飲みなが

らデュノアが来るまで壁に寄りかかって待つ事にする。
数分後、まだ顔を赤いデュノアが俺の前に現れた。

「自己紹介は必要ないだろ、シャルル・デュノア」
「……はい、白波烈震先生」
「よろしい」

デュノアの顔は赤いが、どこか恐怖しているのがわかる。

「そう、怖がるなよ。別にお前を取って食おうって訳じゃない」
「……」
「さて、お前にはいくつか聞きたいがまずは、なんで男装なんてしてんだ？」

時間はあるようでない。戻ってくるのが遅いと織斑がデュノアの事を迎えに来る可能性があるからだ。だから聞いておきたいことを先に聞く。

「今更、あんな巨乳みせて置いて僕は男ですなんて言うなよ」
「っ」

俺の言葉にデュノアは今は無い胸を両手で覆い半身状態になってまで胸を俺から見えないように隠した。

「たく、安心しろって、ガキの身体で欲情するほど飢えてねぇよ」

俺とデュノアの年齢は１０以上も離れている。俺はロ○コンではないし異常性癖者でもない。いや、歳の離れた恋愛を否定しているつもりはない。歳が離れていても好きになる時はどう足掻いても好きになってしまう。ただ、その特別な感情が芽生えなければどうも

思わないだけだ。
まぁ、俺も男だから目の保養にはなるがそれぐらいだ。食べてしまいたいとまで思わない。

「それよりもさっさと答えろ、なんで男に成りすましてんだ?」
「……実家からの命令です」
「実家から?」

デュノアの言い方に違和感を感じる。それに先程の恥ずかしがっていた顔は薄くなった変わりに曇った表情に変わっていた。

「実家って言うとデュノア、だよな?」
「そうです。僕の父がそこの社長で、その人からの直接の命令です」
「その人の命令、ね。とても家族に対する言葉だと思えねぇな」

その言葉に対してデュノアの家族関係は凡そ予想できた。しかし予想していた俺でもデュノアの次の言葉に絶句してしまう。

「……先生、僕は愛人の子供なんですよ」

わずか15歳の子供が他人に向かってはっきりと『愛人の子』と言ったからだ。
そこからデュノアの数年間が語られた。
父親に引き取られた後、色々と検査した結果IS適応が高く、非公式でテストパイロットとなった。父親に会ったのは数回だけで、どうやら本妻にも会った様だ。
その様子を語るデュノアは愛想笑いを浮かべていたが、その声は乾いていて少しも笑っていなかった。

「その後、デュノア社は経営危機に陥りました」

「それは第三世代の開発の遅れでか？」

今、世界は第三世代の開発に移っている。

ＩＳの開発には特殊な例を除いて莫大な費用がかかる。どの国であっても企業は国から支援を受けなければ開発、研究する事が出来ない。

「先生はご存知なんですか？」

「一応、世界中を旅してたからな。各国の第三世代の進捗度はそれなりに知ってる」

と言っても、それは数年前の事で当たり前だが形になっていた国なんて皆無。全てデータ上での存在だった。

そしてデュノア社だが各国が第三世代の開発計画をし始めた時になってリヴァイヴを発表していた。いわばラファール・リヴァイヴは第二世代最後期の機体となる。

それから数年、各国は次々と第三世代型を開発し、代表候補生に稼動データの採取を行わせている所だ。しかし、デュノア社にはその動きが見えない。

未だになんの情報も公開されてないとなると開発が上手くいっていないのだろうと推測できる。

「しかし、リヴァイヴは遅れに遅れた第二世代型最後期だからとは言え、性能は第三世代型に近いモノがあるだろ。じゃなきゃシェア第三位なんてなれないだろうしよ」

言い方を変えればリヴァイヴは第三世代型最初期と言ってもいいと思う。ただ、第三世代型のコンセプト『操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした機体』に合っていないから第二世代型『後付武装によって、戦闘における用途の多

様化に主眼が置かれた機体』と言われている。

「そうですけど、でも第三世代の開発は急務なんですよ。次のトライアルで成果を残せなければ援助を全面カット。しかもＩＳの開発許可も剥奪されます」

「全面カットは仕方が無いにしろ、許可剥奪はやりすぎだろう。リヴァイヴを生み出した企業だ、時間をかければ絶対にいい物を生み出せると思うがな」

「……」

「まぁいい、話を戻すぞ。って事はお前が男装しているのは自社の成績がやばいから、それを持ち直すため一番注目を集め易い男のＩＳ操縦者となってデュノア社のＩＳを宣伝する。ようは広告塔って事か」

一拍置く意味で、手に持っていた飲みかけの缶コーヒーを飲み干した。

デュノアは俺から視線を逸らし俯いている。これから先の事を考えているのだろうが、それはまだ早い。

男装の理由が広告塔というのは先のデュノアの言葉で理解できた。しかし、俺の予想していた理由ではなかった。どちらかというと俺の予想（こっち）の方が利益は大きいはずだ、考えていないはずがない。

「デュノア、まだ理由があるだろ？例えば、織斑の、いや白式のデータを取って来いとか」

「！？」

俯いていた顔を上げ驚きの表情を露にするデュノア。

「大当たりか。なんでわかったって顔だな、そりゃ簡単だ。男の方が今や世界的に有名になった世界で唯一、男のＩＳ操縦者　織斑一

夏に簡単に近づけるんだからよ。それを利用しない手はないだろ？」
「……先生の言う通り僕はあの人から白式のデータを盗んで来いと言われてます」

どこか苛立ちを抑える様にデュノアは俺の予想を肯定した。
俺はデュノアの様子を見て、可愛そうな奴だと思った。
デュノアの父親はシャルル・デュノアを家族ではなく、他人として、使えるモノとして利用しているに過ぎない。それはデュノア自身が一番理解しているだろう。その証拠として父親の事を「あの人」と言って他人事の様に話している。

「でも先生に正体がバレちゃいましたから、僕は本国に戻されますね。まさか初日でバレるとは思いませんでしたよ」

乾いた笑い声を含みながらデュノアは言葉を続ける。

「デュノア社はまぁ、潰れるか他企業の傘下に入るか、どの道今の様にはいかないでしょうね。僕にはどうでも良いことですし」
「俺としちゃどうでも良くないんだがな」
「え？」

デュノア社のラファール・リヴァイヴは第二世代型の完成系といってもいい程に高性能の機体だと思っている。だからそれを生み出したデュノア社には今後も期待している。
先にも言ったがデュノア社は時間をかければよりよいＩＳを開発できるはずだと思っている。

「デュノアはそれでいいのか？」
「何が、ですか？」
「このまま国へ帰ったらお前は一生自由なく過ごすことになるんだ

ぞ。それでもいいのかと聞いている」
「いいのかと言われても、僕には選ぶ権利はありませんよ」

デュノアの言葉は嘘でないのがわかる。
調べる前からわかっていた事だが、この件は各国政府が噛んでいるのは間違いない。そして政府の力は強い。どうやって国を騙してデュノアが代表候補生になったかは知らないが、性別を偽って代表候補生になったと他国に知られてしまえば、フランスの地位が下がってしまう。
だから、デュノアの正体が発覚したら国自体が揉み消すように動くはずだ。そうなれば、当事者であるデュノアの扱いは良くて牢屋、酷くて亡き者として扱われるだろう。
そこまでわかっていながら放っておけるか？

「そうか。ところでお前は俺がお前の事を報告すると思っているようだが……する気ないぞ」
「あぁ、そうなんで……え？」

デュノアが国に戻されないようにするにはどうしたらいいか。簡単な事だ、俺が報告しなければいいだけの話。しかしそれは、ただ先延ばしにしているだけだとも理解はしている。
更識が調査しているんだ。どのみちデュノアの正体が判明する事が確定していた。

「する気はないが、お前に協力して欲しいことがある」

そしてここでようやく俺は本題に入ることができる。
想像していたよりも深い話で、本題にいけないのではと思っていたが。
しかし、タイムアップのようだ。

「シャルル、遅いけどどうし……白波先生？」
「よう、織斑」
「い、一夏」

ドアがスライドし入ってきたのはＩＳ学園唯一の男子学生　織斑一夏だった。織斑は俺とデュノアの顔を交互に見たあと、何を勘違いしたのか俺を訝しげに睨んできた。

「先生、シャルルが何かしましたか？」
「ちげーよ、ただお前ら専属の相談員だから新しく来た男子学生に挨拶しに来ただけだよ」
「本当ですか？」
「疑うなよ。で、お前はデュノアに用があったんじゃないのか？」

横目でデュノアを見ると気まずそうだった。
その様子が織斑を勘違いさせているのだろう。

「あ、そうだった。シャルル、飯はまだだろ？皆で屋上で食べるんだ。だから一緒に行こうぜ」
「え、あ、うん」

俺の話が途中であるのが気になるのかデュノアの返事は歯切れが悪かった。だから俺は織斑に疑われない様に言葉を選ぶ。

「デュノア、困った事があったら相談しに来いよ。だいたい、ＩＳ整備場に居るからよ」
「……はい」
「織斑もな」
「はい、それじゃ失礼します」

織斑はデュノアの手を引っ張って更衣室から出て行った。
一人残された俺は手にある缶コーヒーを捨て、新たにコーヒーを買う。そしてすぐに空け一気に飲み干し俺も更衣室をでた。

欲情するほど飢えてねぇ（後書き）

シャルの胸はサラシで隠している事にしましたが、サラシでも無理が有るような。というかどうやったらあんな洗濯板（アニメ参照）になるんだろう？

意見感想、誤字脱字ありましたらよろしくお願いします。

受けるか蹴るか

「……」
「……アハハ」

放課後のＩＳ整備室には俺や彩流の他に整備科の学生が集まる事が多いのだが、今日はその倍以上の生徒が整備室にいる。
その原因は目の前で苦笑いを浮かべている男子生徒にある。そいつは突然、大群を率いて現れた。
しかし率いた本人の顔を見れば、率いたではなく勝手に付いて来たのだろうとわかる。それだけ先頭に立つ性別詐欺者シャルル・デュノアの顔は困った表情をしているのだ。

「お前、もうちょい自分の立場ってものを考えた方がいいぞ。せめて織斑と……いや、それはそれで迷惑だな」

ＩＳ整備室は授業時間と違って放課後なら生徒が自由に使えるようになっている。その場合、現場監督である俺と彩流のどちらかが居る事が絶対。しかし二人の都合がつかない場合もあるため、その時は他の先生方が見ることによって許可される。
基本ＩＳ操縦者はＩＳを自分で整備できる知識、技術は持っている。そしてＩＳ学園にいる教師達は国家代表候補生クラスの実力を持った人達だ。かなり深い専門用語が羅列する話しでなければ生徒の質問には答えられる。
今のところ整備科の生徒から深い質問はされていないので、そこに問題はないと思っている。

「たく、デュノアお前だけこっち来い」
「え？」

「聞きたい事があるから来たんだろ？奥に別室があるからそっち行くぞ」

聞きたい事と言うか、更衣室での俺の発言が気になっているから俺に会いに来たのはわかっている。内容的にもこの大群、そして彩流や他の生徒に聞かれてはまずい内容であるから奥へ行こうという訳だ。

そして忘れてはいけないのはデュノアに惹かれてやってきた大群連中。１人や２人の少数なら少しは穏便にモノを言うが１０人以上が相手となると流石に面倒臭くなる。俺の印象が悪くなるだろうが、こんな事で時間を潰す方がもったいない。

俺ははっきりと声のトーンを落とした。

「他の奴らは用がなきゃ帰れ、作業してる連中の邪魔だ」

空気が変わったのを感じ取ったのか、大群連中は身体を硬直させ、一部の顔が強張っていた。少しだけ殺気を混ぜたのだがかなり効果があったようだ。

「行くぞデュノア」

「あっ」

とくに大群から何も言い返ってこないので、デュノアの手を引き奥の部屋へと向かった。その際、彩流へアイコンタクトを送ると「貸しよ」と返って来た。

これで彩流への貸しがまた増えたな。いったいいくつ借りてんだ俺は……

「ちょっと座って待ってろ」

ＩＳ整備室の奥にある一室。通称監督室と呼ばれ、俺達整備員の待機所でもある。

部屋に入り手近にあった椅子をデュノアに寄せ、俺は部屋の隅にあるポッドのもとに向かった。ようするに飲み物を用意しに向かったって事だ。

「デュノアー、コーヒーでいいか？」

「あ、はい」

コップにインスタントコーヒーを注ぐ。俺はブラックで構わないが、デュノアはそうはいかないだろうから角砂糖を２つ程入れておく。

「待たせたな」

「いえ、大丈夫です」

コトッとデュノアの近くにある机の上にコーヒーを置く。自分の分は手に持ったままでデュノアと向き合う様に腰を下ろした。

「さて、用件は」

「僕がと言うよりも先生があるのでしょ？」

「その通りだ。俺の言葉の意味を理解してもらえて助かったよ」

デュノアが更衣室をでる時、俺はデュノアに「困った事があったら相談しに来いよ。だいたい、ＩＳ整備場に居るからよ」と告げた。これが意味するのはその前に言った「お前に協力して欲しいことが

ある」の意味を知りたければ整備室に来いという呼び出し。
あんな意味深な言葉を聞いて気にならない奴はいないだろうと思い、俺に会いに来やすい理由を添えてやったって訳だ。

「それで、協力ってどういう事ですか？」
「そうだな、簡単に言えばお前の事を黙っておく代わりにお前の得た情報を俺にも寄越せって事だ」
「は？……え、ちょ、ちょっと待ってください。本気で言っているんですか！？」

効果音で言えばチクタクチクタク……ピーン！と言った感じだろう。
デュノアが驚くのは当然だと思う。この程度の事でデュノアの事を黙っているというのだ。

「本気も本気、安いもんだろ？つーか破格？」
「安い高いの話しではなくて、先生の立場は！」
「アホか、お前が俺の事を気にする必要はないだろう。それにそんなモノを気にしてたらこんな提案してないぞ」
「そう、かもしれませんけど」

自分の身を心配するべき所なのにこいつは他人である俺を心配している。人が良い証拠だな。俺だったら間違いなく食いつく条件だ。
確かに黙っている事がばれたら俺は罰を受けることになるだろうが、その時は全力で逃げるだろう。なに、世界中の軍隊から逃げ延びたんだ、今回も逃げ切れるだろうと思っている。最悪、束の所に行けばいい。本当に最悪だから取りたくない手段なんだがな。
だから他人が俺の心配をする必要は何処にもない。

「そんな訳だ。さぁ、受けるか蹴るかどっちだ？」

「……」

目を閉じ逡巡するデュノア。

数分後、デュノアの出した答えは……

ＩＳ学園というところは良くも悪くも飽きることが無い場所だ。

新しい事があると決まって問題が起きる。ただ前は違ったようで、今年の問題発生率は異常の様だ。彩流が「原因は彼だと思う」などとぼやいていた。それには同意するしかない。問題が起こると織斑一夏が少なからず関わっているのだから。

そして今回も織斑が関わっていた。しかもド中心らしい。

「バリアーが破られたと思えば、なんであんな状況になってんだよ」

今週、俺の放課後は学園施設の調整にあてられていた。そして第三アリーナに向かっている最中に携帯端末から警告音が鳴り響いた。俺の持っている端末には全アリーナの機能状況がわかるようになっている。そこから発せられた警告音の原因は第三アリーナを包んでいるバリアーが破られた事を知らせていた。

それを見た不安が、また束が何かしらをやらかしたか、もしくは送り付けて来たと思い俺は走りだしていた。そしてアリーナで展開されている光景を見て増した不安が一気に霧散した。

アリーナにはＩＳを展開した織斑とボーデヴィッヒの２人が対峙し、織斑の後ろには凰とオルコットの姿があった。

「状況がわからん……っと、デュノア！」

誰かに説明してもらおうと辺りを見回すとちょうどデュノアと剣道少女が心配そうに織斑を見ているのを発見した。

「先生！？」

「って、ここのバリアーが破れてんのか！？」

デュノア達のもとに駆け寄ると、観客席とステージの境目に張られているバリアーが機能を停止していた。バリアーの強度は無人機襲来事件が起きた事によって一段階上げている。打鉄やラファールの攻撃では絶対に破られる事はないし、専用機のＩＳであっても破るのは容易ではない。

ただ容易ではないだけであって、無理矢理に破ることは可能だ。そして目の前で機能停止しているバリアーは無理矢理、シールド無効化攻撃を有する織斑の攻撃で破ったのだろう。この場にいる生徒と状況を見るにそうとしか考えられない。

「ちっ、面倒な事を。デュノア、状況を簡潔に説明しろ」

俺が頭で推測している間に織斑とボーデヴィッヒは戦闘を再開していた。あきらかに二人の戦いは模擬戦ではなく手加減無しの試合のように感じた。

「それが僕達も来たばかりでよくわからなくて。最初は凰さんとオルコットさんがボーデヴィッヒさんと模擬戦をしていたみたいなんだけど、その内容が模擬戦の様に見えなくて」

「それでどういうわけか織斑があの場に乱入したって事か」

「はい」

「あーくそっ。おい、お前らステージから離れろ！バリアーの機能が一部上手く機能してない！攻撃の巻き添えをくうぞ！！」

実際にバリアー強度が低下している。今なら最低威力の武器でもバリアーを壊せる程にだ。観客席にいる生徒に警告を出したあと俺はステージに出ようとして身を乗り出した時、俺の横を何かが駆け抜けて行った。

「今のは」

誰だと把握する前にガキンと金属同士が激しくぶつかり合う音が耳に届いた。

「……無茶苦茶だろ」

ＩＳの戦闘に生身で入るのは自殺行為に等しい。等しいのだが、織斑とボーデヴィッヒの間には生身の織斑千冬がＩＳ補助なしに近接ブレードを持って二人の攻撃を受け止めていた。

どこまでも常人離れしている奴だ。

「これだからガキの相手は疲れる」

千冬はドッと疲れた顔をしているが俺は別の意味で疲れたぞ。

その後、千冬が続きは学年別トーナメントでつけろと言ってこの場を収めた。

そして俺はバリアーの修復で部屋に帰ったのが日を回ったぐらいと知らせておこう。

疲れた。

受けるか蹴るか（後書き）

かなり空いてしまってすみません。
短いうえに進んでないｏｒｚ

時間がぁ……時間をください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3737q/

IS＜インフィニット・ストラトス＞－Strongest and Weakest－

2011年10月20日08時26分発行